

大塚徹作品

詩

I 北海の蟹（昭和四年―昭和九年）

北海の蟹	16
琉球の女	16
暴風	17
あまだれ	18
いたつきの秋	18
生樹を焚く	19
死貌	20
亡失の詩	20
破産	21
セキズイの雨	22
寒飢の冬が来るぞ	22
セキズイ正月	23
蟬穴	24
遺書的な詩	25
破笛を抱きて	26

冬から冬へ	27
秋は白霜の訣別	27
杏の木	31
掌・断章	31
冨	32
虚冬愛妻の詩	33
流木	34
夜	35
海浜の虚	35
ふるさとの燭	36
吹雪の幻灯	37
冬眠の夢	38
祭礼の印象	39
太陽相尅	39
靴	40
光明の掌	41
死なす	42
秋冷の虚	43

暴風の出帆 44

II インテリの霧 (昭和一〇年―昭和一八年)

五月日本の韻律 48

三百年後 48

インテリの霧 50

掌上四季 51

ひびき 52

美しき暴力 53

日本の忿怒 53

月と虫と儂の饗宴 54

毀れた生活 55

生活の門 56

春の雪馬鹿 57

雪の夜の倫理 58

梅雨の窓 59

死刑陰影 60

雪解 61

いたつきの春 62

母の紐 63

晩秋老爺の像 64

振子 65

杳き暴風 66

わが墓碑銘 68

明日の腕 69

交替 70

III 放蕩息子 (昭和二二年―昭和四九年)

秋 74

献詩 74

杏 75

放蕩息子 76

あやつり神楽 77

ちよ経 78

除夜の鐘 78

屑 80

鏡とパン 81

鶴還る 81

日本の灯 83

野分 84

城よ 85

崖 87

タウル氏の幻想 88

隕石の唄 90

橋物語 91

碑裏咒文 93

人間族の危機について 94

迎春の姫路城 95

詩と死の証 95

いたつき心経 96

吐息の幻想 97

自殺 98

解説 (安藤礼二郎) 100

小曲

浄慕の小曲 104

惜春 104

秋はしろい 105

おもいで唄 105

湖んだ夜 105

双葉 106

梅の実 107

いたつき 107

草にかくれて 108

民謡

割ってみしようか 110

農家閑散 110

姫路魚町情緒 110

ほれたんだらう 111

かもめ 111

米作り 112

こんぶほしぼの 112

菅戸の畑で 113

戻り船 113
 赤穂御崎情歌 114
 菜ッ葉服のうた 114
 杏の花 115
 おかよ可愛いと 115
 まつかき 116
 踊り忘れた 116
 いらぬ世話だよ 116
 情夫ができたよ 117
 雪割草 117
 捕鯨射手の唄 118
 ざっくばらんに 118
 当世恋愛講座 119
 すっちょんちゃん 119
 鶯 120
 白鷗の唄 120
 捕鯨小唄 121
 桜畑初漁跡 122

死ぬ気で 123
 待ちぼうけ 123
 プロレタリア子守唄 124
 田螺の唄 125
 播磨鯛漁節 126
 お夏清十郎音頭 127
 秋蚕 128
 憂鬱華 128
 魚町正月情緒 129
 闇夜二章 129
 中禅寺小唄 130
 百姓の唄(断章) 131
 蟹工船 132
 生臭坊主 133
 謎かけ 133
 恋文 134
 赤トンボと雨がえる 135
 草刈唄 136

筑波の唄 136
 ひとこと聞きたい 137
 つぐみ鳥 138
 赤穂御崎情歌 138
 朝焼け 140
 ほたる 140
 雪がふる 141
 母さまよ 141
 春宵夢 142
 畑うち唄(小景) 143
 河豚 144
 すぐ春だ 144
 眼を病めば 145
 薄虹 145
 死のうか殺そか 146
 冬齋 146
 三原(古調) 147
 明石千鳥(古調) 147

角力音頭 148
 物語 149
 風 149
 ふかむ秋 150
 スタコラ節 151
 須磨の月(組曲) 151
 訣郷の唄 152
 鶯(即興小唄) 153
 あらしの海 153
 翔ばせおいて 154
 裸木 154
 米のなる木 155
 かぶと虫 156
 残る色香が 157
 秋 157
 野火 157
 五月の空より 158
 暴風 158

蹴る	153
佗住い	160
母看とり	161
風邪ごこち	161
笛	162
輝	163
納涼満月おどり	163
煙	165
兵庫音頭	165
子守唄	168
歌謡	
走れ、白帆	172
夢の磯辺	172
姫津双六	173
播磨音頭	173
お城祭りの唄	174
お菊数え唄	175

菅笠しぐれ	176
飾磨みなと節	177
佐渡しよんがい	178
姐御がらす	179
三ツ山音頭	179
オーライ節	180
お城恋しや	181
あゝ白鷺城	182
古城幻想	183
清水小唄	184
新姫路シャンソン	184
アーケード行進曲	186
やぐら屋の娘	187
国民歌、会歌、校歌その他	
ベン仲間の歌	190
龍野ロータリクラブ歓迎歌	190
播磨燐寸音頭	191

老人会おどり	191
姫路市連合婦人会音頭	192
野里小学校五十周年讃歌	193
野里小よいこ音頭	194
四郷小学校校歌	195
東光中学校生徒歌	195
東光中学校応援歌	196
広嶺中学校「応援音頭」	197
解説(八木好美)	198
短詩	
アトム之眼	202
指紋	209
からすき	211
「俳句十人集」抄	213
解説(鳳真治)	215

大塚あき作品	
詩	
狸々莊物語	220
風	220
虫籠	221
満潮のたより	221
断頭台の下で	222
水死人	222
終着駅	223
猿の最期	224
帝王	224
ばく	225
墓碑	225
赤ちやんの虹	226
矛盾	226
時間	227
古着	227
花輪	227

大塚徹作品・詩

サリドマイド 228
影 229
顔 229
アポロ 229
短刀 230
靈魂 230
煮豆 231
孫 231
子守唄 232
齒 232
ほくろの女 232
前齒 233
手 234
養老院にて 234
ニャンニャン 235
死刑囚 236
追憶 236
檻 237

栗 237
根 237
釜 238
丸干 238
短歌
五十一首 242
俳句
二〇句 248
解説(市川宏三) 249
年譜 251
あとがき 259

I 北海の蟹(昭和四年~昭和九年)

北海の蟹

陽に興じては
花粉のごとく風にながれ
たそがれにおどろきては
鳥のごとく巢にかえる
あわれ友よ
今日もまた旅をゆくか

海あらし

北国の大いなる蟹を
ふるさとのわれに送りきたれり

(この蟹の貌は

恐げに 醜く

毒気あり

食えばかならず死すならむ)

おどけたる手紙をよみて

恐れを抱きしごと

わが家の妻も児どもも食わずと言う。

北海にそだちし蟹は

今宵 南海の

つれなき男に 食われいる

おどけたる友よ

毒気ある蟹は

美味し。

〈昭和四年、愛誦〉

琉球の女

杏の實の匂うたそがれ
私は 風の贈物をうけよう。

蒼白い月光にぬれて

デイゴの樹にまつわる

夜潮のささやきを聞こう。

この春 この貧しい町におとずれて
眉のほそい 琉球の女たちは
蛇皮線を弾いて 異国の酒を売った。

鼓を打ち、笛の音にあわせて

エキゾチックな 色あざやかな歌々を

かの日の 疲れはて 青ざめた

娘子軍の愛しい踊りよ!

(その虚洞な瞳は穹を眺めて

遠くふるさとの老母の姿が消えた)

杏の實の匂うたそがれ

私は この漂泊の人達のかなしみをよせて

熱帯の強烈な酒に酔いしれよう。

私は 風の贈物をうけよう。

〈昭和四年、炬火〉

暴風

A

かぜ

空とおく

かもめをちらし

かぜ

磯松を裂きて

われらに迫る。

B

ああ ひょうひょうと

読経よ!

泡立つ墓地よ!

今宵 幾艘の舟を呑みて

幾多の命を埋むることか。

〈昭和四年、炬火〉

あまだれ

たらん！

たらん！

たらん！

軒下を落ちる

雨滴を

私は聞いている。

こどもたちは雨が降ると

虚ろな悲しい瞳をうるませて

軒下のささやかな雨滴の穴に

ぬけた歯を埋める

風は土塊をはこび

人々は繁くゆききするので

貧しい穴は幾度もこわされ

また幾度も

雨滴は穴をうがったが――

まっしろの歯が生え変わる

夢を追いつつ

幼き頃埋めた歯のゆくえ

追いつつ

たらん！

たらん！

たらん！

私はいつまでも

雨滴の音をなつかしく聞いている

〈昭和四年、愛誦〉

いたつきの秋

ぼつねんと

ひとり ぼつねんとぬるま湯にしたる。

りんりんりん むるりん むるりん

草むらふかく虫はなき

真昼の湯槽は

青空をたたえてきよらかに……

村童よ 秋をゆすつて

あの虫はどこでなく。

かりそめに病を得て

いまだも癒えず

いまはもう癒ゆるのぞみもすくなくに

ここに来て 温泉の里のあけくれは

ひとり ぼつねんとぬるま湯にしたる。

陽はさんさんと野天風呂にひろがり

鄙びたる村童は

あおざめし都会の男に馴れて戯々とあそぶ。

いまもとていたつきの瘦軀を指して

(みいら みいら)と囁すにあらずや。

ああ南国のいで湯の秋は肅條とかたむき

病はいつ癒えるともしらず、
みいら みいらと囁かれて
ぼつねんと葉湯にしたれば
るるるるるるるるりん
あの虫はどこでなく。

〈昭和五年、愛誦〉

生樹を焚く

じゅんじゅんと生樹を焚く。

きさらぎの

曇天に、

むくもくと白煙を昇げて

蒼ざめた生樹を焚く。

じゅんじゅんと生樹は燃える。

葉脈がもえる。

葉末がもえる
じみじみと蒸気を吐いて
葉も枝も生樹は燃えてゆく。

冬朝の
曇天に、
赫ツ！と燃えあがるいのちの焰むら。
じいんとひからびてゆくいのちの翳り。

あ、蒼々と骨が燃える。
あ、白々と骨が崩れる。

〔昭和五年、愛誦〕

死貌

寒々と蒼ざめた祖先の太陽――
椎の根をふかく沈んだ石の寝棺

母よ

私は熱に呆うけて
せんせんとあなたの子守唄をきいた。
いまだいとけなき日の搖籠の唄を……
緋牡丹の花瓣をめぐる白蛾の
遠のいてゆく幽遠な羽音をきいた。

あ、深海の昆布のように
舌にからまる 白水の泪。

〔昭和五年、愛誦〕

忘失の詩

緋鯉は
ほとぼしる噴水感情をかんじて
眞夏の太陽にジャンプした。
さんさんと五色の虹を身にあげて、

緋鯉は輝やかに昇天した。

おかあさん。
いたつきの腫は幾年月の春を死んでいたこと
か。

絶えいるセキズイの痛みに、めざむる
泉のかたほとり。
ろんろんとひびいてくる搖籠の唄をきいた。

ほとぼしる噴水の空に
てんでんとさんざめく金の鱗粉よ。
あ、失われし金の緋鯉よ。
いたずらに歳月のみながれて――。

〔昭和五年、愛誦〕

破産

いちまい

また、いちまい
壁土は剝がされてゆく。
うずたかい
壁土の山。

みつめているものの泪。
みて見ぬ振りするものの焦立ち。
じつと耳をすますと
ばらり ばらり
壁土は落ちてゆく。

口笛鳴らすおれは空腹。
むせび泣くおつかあと妹。
あああ、この壁土の堆積。

もがいても
あせっても
どんなにしても落ちてゆくさだめ。
落ちてゆくべきところに堕ちてゆく。
他人事の悲劇

今はわが身にのしかかる壁土の堆積。

〔昭和五年、梔子〕

セキズイの雨

雨もりはたんたんと骨をならして
滴りやまぬ秋冷の雨

（死なば死ね）

ひゅうろひゅうろセキズイの笛ふけば
たちまちに 地獄の夜の幻想は垂れてくる。
釈迦もキリストも情痴に狂う瞳の説法。
童貞と処女を賭けた去年の恋はサヨオナラ。

されば 裏町に蒼々と病歿する月あり。
今宵こそ 朽窓に毒の花酸酔れたり
いまはもう まるで髪嘆き阿呆のように
たららんらんと二度目三度目の恋漁る。

幾度恋しようたらん たららん たららん

たん たん……

つる本能なればそれもいたしかたなし。
ひゅうろひゅうろ幻想の笛をふいて踊りおど
れば

これはまたなんと悲しきセキズイの雨。

〔昭和六年、愛誦〕

寒飢の冬が来るぞ

秋だよう
争議に敗けた腹立しい秋だよう
今度こそはと

俺達は弾丸のように燃えて
敵にぶつかっていったんだが
口惜しいではないか
あのスパイ

あのガラ幹の裏切者に
みんなやられて みろノ
野良犬のように街頭に飢えているのだ

ながいものには巻かれてか
ふるさとのおっかアよ
その悲しい瞳で口説かれると
俺はつらい
燃え盡くさねばおさまらぬ
烈火の焰にもぶり勝ちだ

それにしてもいつになったら
太陽は氷の街を
照らすというのだ
踏まれても引き千切られても雑草の
春には芽を噴くものを

瘦ても枯れても
息の根のあるかぎり俺達は敗けぬぞ
花見小路のインテリ娘ミブ子よノ

「もう一度考えて見るわ」だって
なんて生ちよろい女^{メカ}郎だ
いまはもう空腹に水道の水つめこんで
これからのたたかいを考えようかい

争議に敗けた秋だよう。
なんと哀しい
なんと口惜しい秋ではないか。
やがて市川堤に風が唸って
中国山脈に雪が降るぞう
ああプロレタリアには恐ろしい
寒飢の冬が襲ってくるのだ

〔昭和六年、土偶と詩人〕

セキズイ正月

ひる ひる ひる ひるる
セキズイは軋る。

じつと耳をすませば

セキズイは軋る第二頸骨と第三頸骨。

おもしろやセキズイ軋る。軋る。

去年の太陽——魚脣のごとく男棄てし加古川

の女よ。

浪あらし日本海の温泉に

胸病みて、いまをこそ杏き松葉牡丹の情痴を

抱くとか

寒鴨をわれに送りて逢えばまた悲しき恋なが

ら

ほそぼそと われとてもセキズイの疼きに

年月のみながれて今年二十四の春となる

戸外は氷雨ふる春の夕ぐれ。

それら悲しき恋の女、ユリアンよ。ウメンチ

よ。クニツペよ。ツンよ。

今年こそ蒼白いインテリの戯びやめて、タイ

キンよ。セツシャンよ。ミツシャンよ。

ああ、血潮吹く赤旗を黎明の風に漂わそうぞ

ふるさとの屋根裏の朽窓に冷えし火桶抱きて
バンバンと笑うひつじ年の正月。

ひる ひる ひる ひる

セキズイは軋る。

またしても セキズイは軋る骨と骨と相尅つ

ひびき。

黙念と屠蘇に酔えば

瞳とじてああセキズイ軋る。軋る。

（昭和六年、朝）

蟬穴

蟬穴にはふかふかと季節がねむっている。

滴る冷水をのみ、草根を齧って

蟬は今日もはてしない旅路に疲れた。

時風。

蟬穴にころげこんだタンポポの綿毛を觸手に
地上に躍動する春の気流をかんじた。

たそがれ。

蟬は杳々と明るい蒼穹を胸裡に描いた。

メリンス友禪の発散する体臭を嗅いで

蟬は白い素足のお嬢さんに童貞を擲った。

あ、かくて春もすぎ真夏もくれた。

烈日に幾多の蟬が生まれ

ここにルイルイと蟬殻を葬って

やがて墓場の冬が恐げに 寒げに

黒衣をまとして蟬穴を覗くのだ

（昭和六年、愛誦）

遺書的な詩

—ニヒ・カンにおくる—

その夜も窓べに空っぽの—リン—しがころげ

ており

机のまえに私はぼつねんと座っており
わたしの他には誰もいない夜更けの部屋だっ
た。

その夜も、秋は私の神経になんの關係があつ

たろう!!

ただもう、阿呆のように病人のように老人の

ように

朽窓には暗い影法師が揺れていたのだ。

その夜も、私は私の影法師をじつと見つめて

いたのだったが

私はタンタンと秋雨のしづくを聴いていたの

だが

私は誰であるかわからない幽婉な妻の面影を

夢みていたのだが

こんな夜がいつかたしかにあったようだし

今夜ふたたびそれをくりかえしているのでは

なからうか？

そしていつかまたかならずやってきそうに思われるのだ。

私の親父から私にいのちの恐怖が伝わりましたから私の子供に血の伝統がなされ

ああ、人間は永遠に悲しいくさをくりかえさねばならぬのか。

〈昭和六年、愛誦〉

破笛抱きて

道はじめじめと陰惨な泥濘地帯につづけり。
沓ろか明るい燈火がみえ、一步踏み込むと
深海の昆布のように足にまつわりつく雑草が
茂り
ときとして氷藪まじりの雷鳴が咆哮する。

太陽も透きぬ頭上の森林からは
恐ろしや吸血のヒルが若き旅人の頸を覗い
つい、踏みちがえればとりかえしのつかぬ奈
落へ沈みゆく。

ぼうぼうと乳霧こむる夜は
ゆくての燈火遠ざかり近づき
たえず火花センコーのように明滅するので
若き旅人は瞳病みて盲目となる。

いまはもう歩み疲れて夜もふけて、路傍の石
に腰おろす。

想念はそぞろに去日の道ふりかえり ぶりか
えり

ああ、夢にのみ団欒かに故郷の山嶺をなつか
しむ。

——追憶は緑青の並樹繁交い
草むら豊穡かに、タンポポ、スミレなど
丘いちめん満ち溢ふるる光芒よ！

漣う白雲よ！ ヒバリよ！ カゲロウよ

蒼穹暗れて、ああ南国の微風は香る春の
ほほえみ。

その日、幽婉に蝶は舞い、小鳥は歌い
父は悠々煙草くゆらし、終日畑を打ち

母は慈愛の麦笛を見等にあたえた。

かくて来る日も来る日も

児等はうちつれて山野を駆けり

うち囁し、うち興じ、麦笛を抱いて神の白羊
に戯れたが——

冬から冬へ

夜半の風に砂時圭は弛ゆみなくこぼれて、見
はてぬ夢のさびしさよ。

笛傷つけて、ひとりの姉は泥沼に沈みて浮か
ばず

いまひとりの姉も笛失いて帰らず

のこる三人の兄弟は、鳴らぬ笛抱きて今日も
旅路に踏み惑う。

ハコダテの雪の波止場で
風の便りにオッカアの死を聞いた。

金持ちの親類は

誰も知って知らぬふり、

オッカアは納屋のすみっこで凍のように飢
えて瘦せて死んだとよ。

悲しいではないか。腹立たしいではないか。

筑波おろしに オッカアは死ぬまでこのやくざな俺を呼びつづけたとよ。
巷で酔っぱらって その夜俺は人間らしい涙を流した。

× ×

ああ、それにしても
ふるさとの 驚の住む山脈を忘れて幾年になることか。

ふるさとよ！

ふるさとよ！

野良犬のように俺を生んで 俺を殴って 俺を追い出した

ふるさとよ！

もしも夜明けの冷たい嵐にふるさとを夢にみたときは

こんなにも 不覚の涙が流れて、同志よ

ついでかたきうち誓いも忘れがちな

× ×

住めばふるさと。

住んでこそそこがふるさと。

俺には俺の働くところがふるさと。

いまさら夢にのみふるさとを懐しんで泣いた

とてなにになろう。

× ×

一九三一年の冬——

尨大な失業者の群れ。

春と夏と秋と 屈辱の月日のみ流れてまた一年の冬がめぐってきた。

× ×

ストに敗けて首を蹴られりや
この土地もこれでサヨナラだ。

いか。

すると水族館の海底の昆布に白い風が揺れて
おまえは嬉々と七宝の鱗光を放射する一匹の
雌魚である。

悲しいことに、俺は呆うけて恋の明暗を彷徨
する

ここでは貧しく盲目の、だが若く豪奢な雄魚
ではある。

深い情痴にうえた夜の街の男たちに、

ミプ子よ

水族館の窓を開放してもそつと灯を明るくし
てくんねいか。

おまえの奇怪しい抱擁と吸血の接吻にぬれて
こども情熱は狂奔する。この俺のために

お母アさんはどんなに悲しい瞳で老けてゆく
ことか

そして世の中すべての聴かしいひとたちは
このルンペンをどんなに嘲笑けり打撃するか

おお 雪をまじえて日本海はドンド・ドンド
と響くであろう
おお たちまちに山陰にも飢餓の暴風は襲う
であろう。
なにくそ。
なにくそ。
俺たちは土籠のように
地中に潜りこんで真赤なダイナマイトを装置
ける。

(昭和七年、破船)

秋は白霜の訣別

今夜の闇はなんとこの昏迷のふかきだ。

なぜに俺はこう淋しく焦立しいのだ。

糸喫茶店のミプ子よ！ せめて

秋は憂愁の窓辺に淡々とリンを焚いてくんね

口惜しいことには

かつて掌を流れた清浄な血潮が濁っていった

× ×

尖尖と月が照る夜は

どんなにしても、どんなにしても瞼の裏に母

が泣いて眠られぬ。

故郷の古城のほとり、姫路のまちの貧しい家

よ。

朽窓の灯光がうつすら寒く掌を漂れた。

その夜ふけ

僕は、掌の血を凍らせて売れぬ詩を書いた。

× ×

ああ、二十五の春にもなって

今朝の暖い陽射に翳す蒼白い掌。

これはこれは、春の日中の阿呆の戯態か。

ただもう、うつらうつらと掌を開けたり閉めたり。

春というに、花の如くに掌を翳せば

たちまちに、陽は蔭り、雲は駆り、

ああああ、掌に霽々と雪は降り積む。

〔昭和七年、愛誦〕

風

風よ！

風よ！

などかくは

夜半を目覚めて

男ひとりを泣かしむるや。

わが殴られぬ。

わが踏みにじられぬ。

傷つきしこの身ひとつを

娘の妻と別れて

とぼとぼと逃れ滞りぬ

——ふるさとの母のふところ

友も情もみんな去りぬ。

ああ、まこと裏切りばかりの世の中よ！

この男、この拗ねものの

瞼のうらにのこるなり

——瘦せて優しき妻の面かげ。

（石下の蟬も鳴きひそまりて候。

土壁の蔦も枯れつくして候）

離り住みてあれば

あけくれの秋の便りもふかみたりき。

風よ！

風よ！

いとせめて風よ、われをいましばし眠らしめよ。

われとても息あつきひとりの男なれば

やがてはしゃんと目覚めむもの——

傷つき破れては、かくも寂しき眠りの束の間

を、

静かに

静かに

風よ、軒下に来てじつと息吹をひそませよ。

風よ、聲音を忍ばせてそつとそつと遠ざかり

ゆけよ。

〔昭和七年、愛誦〕

虚冬愛妻の詩

妻よ。なんにも愚痴るまい、夢も昔も

ただもう古呆けた青磁のように、

しよせんひびのはいったこの身と心。

洗えば血の滲む生活の陰影だ。

叩けば埃もたつ情痴の汚点だ

妻は妊娠の

やがて産れでるわが子の心もとないゆく末よ
たがいにいたわりいたわる今朝の冬——

家をめぐってすすり泣く、風の
せめて裸身にかえる敬虔い落葉を焚いて
なあ、いとしい妻よ、ともに熱い溢茶など喫
ろう。

端座すれば、身边に濛々とたちのぼる

湯気は淡粧のニヒルの香氣。

妻も停凭りて泣く竹影の朽窓。

〈昭和七年、愛誦〉

流木

漕しない 海霧の
濡れて漂うところの磯辺。

流木の——わが妻よ。

かい抱けば
身にも沁む 海藻の匂い
抛てば

眼刺す 夜光の虫か

流木の——わが妻よ。

俺も海鳥 岩暗く

濡れて漂うところの磯辺。

〈昭和七年、愛誦〉

夜

こんな夜は、白くふくよかなる砂丘をくだり

つめて

海藻しげる かぐろき磯蔭に

オトコは丹念に 眞赤な海警車を探している

こんな夜は、海藻焚く遠い島あかりを瞳に点
して

しんみりと静かに更けてゆく海浜の恋の

白いシーツの浪にうら若き男女の情死があつ
た。

こんな夜は、オンナは純白の蛇身と化して
臉や耳や唇や、薄情なオトコの肩に絡みつ
いた

昔昔の妖婉な伝説がうまれるのかもしれない

こんな夜は、松も月も乳白色の霧を滴らせて

砂丘を歩むオトコの覺音が浪のように高まる
ので

眞赤な海警車はしつとりと濡れてゆく。

こんな夜は、濡れた海警車を夢のように廻し
て

オンナはろろんと海濤たかき異国の窓辺に
故郷の栗の花の匂いに染むオトコの爪を抱い
て眠る。

〈昭和八年、愛誦〉

海浜の虚

ぼつちりと、情艶の灯を点して

夕昏の雨のように、

私の胸にしるびこんできたオンナよ！

おまえは、眼のない魚の住むという

翳してみせた。

オナナは、悄然と泣いて、やがて吹雪の方向に消えていった。

(ああ、心のなかのもうひとつの私よ！
声のない声で、陰影のない掌で、幻想のオナナを呼びもどすのだ。あわれ、犬のように飛出して、吹雪の足跡を追跡するのだ)

だが、それは、深夜の暗に映写する吹雪の幻燈だった。

ただもう私は、化石のように火桶を抱いて、
臉を閉じて
遠ざかりゆく吹雪の音を、枕と聴きすましているのだった。

〈昭和八年、愛護〉

冬眠の夢

野晒の

氷雨に打たれ、打ち拉がれ
白雪の下積に冬眠する

雑草よ！

来る日も 来る日も

黒衣の太陽――

耳をすませば

えいえいと忍従する野晒の合掌。
ぼうぼうと呻吟する雑草の祈念。

――春は南の海よりつばめの翼にのって訪ずれる。

暖き微風に胎んで蝶の子は生まれる。

雑草は貧しきながらの花を掬ぶ。

いまは冬。ああ、野晒の

よりかたまつて裂風を弾き、積雪を突き、
昂然と伸びあがらんとする気概をみせて、
されど、氣息焉々 雑草の
あえかにも春を待つ冬眠の夢よ。

〈昭和八年、神戸詩人〉

祭礼の印象

野のはてに、
白紙のよな月が昇った。

そのしたで

昔、農民たちの貧しい祭礼があった。

オトコとオナナが、
魚のように悲しげな瞳で、
ばらりばらり踊りくるっていた。

耳をすますと

こぼろぎのように
とぎれては、また
ほそぼそと音頭の唄がきこえた。
雲のむこうから
ひえびえと風が吹いてきた。
水のように焚火をめぐって、
農民たちの寂しい秋の祭礼があった。

〈昭和八年、神戸詩人〉

太陽相対

拭えぼとて消滅する汚点かよ。
しむしむと肋骨に滲透む生活の雨漏。
ちくちくと脊髄刺す思想の氷柱。

臉の裏に描く、幻影の、華麗の暴力。
深夜、血に狂う、酒池肉林の、白狼の舞踏。

白昼、敬虔しき假面の、飽くなき搾取の殿堂。
日夜、寒月に牙爪を研ぐ階級の相尅。

やがて生まれいづる嬰兒の産衣裁つ
掌に、寒々と焦衰の鱗光を焚いて、
妻よ！ 歎けばとて齶るる胸かよ
ひたひたと濃霧に濡れて、帰えりくるは
白鬼に屠られたる、血泥の、同志の屍のみ。

嗚呼、腹立たしきは暴虐の湿風。
哀れ、口惜しきは忍従の雜草。
呪咀する、侵略の人柱。資本の奴隸。
打破する、宗教の伝統。労農の地獄。

今日もまた、血涙に燃ゆる屈辱の西天。
己れ自ら崩壊する第三朝の太陽。

妻よ！
生まれいづる吾子は革命の分身。
地軸に潜み、地殻を破り、東天に鷄鳴する新

しき太陽。
嗚呼、黎明わが世の春も速からじ、程遠から
じ。

（昭和八年、愛誦）

靴

寂し
寂し
靴。
妻は妊娠めど、幾日帯らぬ鷗どり。
遠く母は病めど、かくて不肖の息子なり。

寂し
寂し
靴。
円き丘ありき ほろほろと合歡の花咲けど、
ああ、故郷の土、無頼わがついに眠る墓なら

ず。
寂し
寂し
靴。
海裔ろかなれど なにをか想う。
船見えずなりて また なにをか歎く。

寂し
寂し
靴。
まこと寂し寂し靴。異国の白昼むなしく
街ゆきて、街のはずれに波止場あり。

（昭和九年、神戸詩人）

光明の掌

波止場のある 明るい白亜の都会にも

裏にまわれれば暗い不見目の湿地がある。
或る日私は、老い衰えた淫売婦の餓死を見た。
私は そつと瞳をそらして、
私は私の掌を眺めた。そして傍の妻の掌を眺
めた。
私は群集の掌を、そしてまたしみじみと淫売
婦の掌を眺めた。

夜ごと夜ごとの汚濁の街に、
その掌は虚しく咲いた開の花だった。
掌は 汚し辱められて獨り萎んでいった花だ
った。

だからその掌は まるで孤独魔のように、
いのちのかぎり わが身独りを愛撫ってきた
のであろう。
ああ、生き貫くその掌は、もう浅ましい人間
の掌ではなかった。

枯木のように皺だち着纏めたその掌から、
いまにも尊い光明がさしてくるようだった。
群集は皆聖獣のようになだれていた。

私と妻とは、黙々と肩をならべて
はてしらぬ敬虔な悲哀に沈みながら
夕昏の淋しい波止場の方へ静かに歩いていっ
た。

〔昭和九年、神戸詩人〕

死なす

死なせてはならぬ
死なせてはならぬ
心の中の霧の港を船がゆく。
ましろうい水脈の
杳く 杳く 消えてゆく水平線。

ああ、吾子は革命の分身

正義の 眞理の、
この子生きてこそ伝達する父の思想。母の祈
願。

死なせてはならぬ。
この子いま死なせてはならぬ。
経済の危機。侵略の相克。学説の咒縛。

横行する黄色旗。潜行する赤色旗。

（右翼の、左翼の、合法の、非合法の）
東洋の狼。西洋の鷲。

内憂。外患。おお、いまに爆発する世界の動
乱。

あわれ、父母
狂うばかりの海獣の
岩根を噛みて砕くとも
この子、きつと死なせてはならぬ。

眞理の夜明け——。
やがて、撃破する暴虐の要塞。建設する労農
の独裁。

死ぬ。
死なせてはならぬ。
死ぬ。

遂に、遂に、この子を死なす。
ああ、心の中の霧の港を船が出てゆく。
父も母も 泪にばやけて
杳く、杳く、消えてゆく水脈を追う。

〔昭和九年、昭和詞花選集〕

秋冷の虚

獄をいでて故郷に帰るの日——

ほうぼうと 幼けない日の鳩笛を
どこか薄明りのなかで うつらうつら鳴らし
ていた。

ほのぼのと ふるさとの灯のように
うら若く優しい母の面影がまたいた。
海の涯とも 雲の上とも
まるで 呼びかけようもない杳い円光の情痴
の座に
菩薩のように気高く女人の姿が入滅していっ
た。

光る蜥のように たちまちと臉を涉って
紅顔の童子は早も壯麗の若者となっていた。
若者は崇遠な眞理を尋ねて

戒律の海底を探索する潜水夫だった。
海底には海底の法律が 審判が、厳然と鉄鎖
の規約があった。

朝に 航海する国際資本主義の使節を
夕に 侵略する反動の浮城を爆破した。
若者とその仲間たちは 目のない魚族のごと
く深海に沈潜した。

そして流沙のようにながいがい暗鬱な人生
が過ぎていった。

いま 漂流のはてを
若者は心の港に踰縁と帰ってきたが
すでにふるさとの秋冷ふかく
しようしようとして虚しく雨がふりつづいていた。
忍びよる終焉の気配のように
るるると寂しく虫が鳴きつづけていた。
雑草の家はかたぶき
朽窓の 父母の灯も昔に消えて
この日 糺弾の十字架に 若者は敬虔な白髪
の老人だった。

（昭和九年、昭和詩人）

暴風の出帆

泪しとど

霧と降り

檣燈 濡れて

愛情の波止場を――

霧うつつ

雲と湧き

白鷗 燃えて

青春の港を――

あやまちならむか、

日頃、

国禁の書を読み

社会主義者と交わり

母に不幸の

妻に不実の

無頼なり

ふたたび帰る日なき

熱血の出帆。

故郷に

牢獄ありて

ながき歳月の流沙よ！

山嶺に

断頭台ありて

赤き革命の新月よ！

あやまちならむか？

――されど

まこと あやまちならむか？

――ああ、されど

ついにして行きぬ

あえかに悔なく

見はてぬ夢の……

汝の骨

いざ、吹雪野に埋めよと

大鴉なく

北方の 暴風へ――。

（昭和九年、未発表）

五月日本の韻律

余の友人たちを呪咀する母親のこえに余は午
前十一時の宿酔。

脳裡に様々の豪華な悪徳の蜃気楼が咲痴れる。

「純粹の鶯」も、もう歌わなくなつた五月、

雲霞があんなに恐ろしく変化するのは確か岡

崎清一郎君の趣味だろう。

西脇順三郎君の今日の喪に

北川冬彦君・竹中郁君・萩原朔太郎君なども

雲霞のなかからはるばる帰ってきたから、

余らの感情も新たに飛躍していよいよ詩作に

懸る。

嗟呼ノ交叉する明滅する智と情の時間と空間

の不可思議なるアラベスクよ。

嘘の裏には、いろいろな愛情の言葉が書いて

あるのだろうか。

だから瞳をとじると昏々と湧いてくる倫理の

泪……

まこと叡智こそは常識となつて

君たち世界の感情もさらに一段と飛躍するの

だが。

それぞれの視線が流動して愛情の倫理の音数

律、そうら見事なる哉

五月日本のホリゾンに透明の裸像を彫りあ

げてゆくではないか。

〈昭和一〇年、ばく〉

三百年以後

昔、僕は 甘酒売りの老婆となつて、

三百年、大江戸の群衆のなかに棲息した。

夜更けの街の 柳の下闇などで

ひよつくりこの僕の 老婆の貌を見たものは、

流行病のように 三日経たぬまに黒死した。

人々の伝説に 僕は 汚濁の街の呪縛の疫神

だった。

×

×

いまも 僕は 都会の群衆のなかに棲息して

いる。

いまはもう 僕は 甘酒売りの老婆ではない。

蓬蓬と頭髮を逆巻いて、爛々と眼光を鋭尖ら

せて、

飢えて 血走って 僕は 搾取の街の赤き瘦

狼だ。

学者は顕微鏡を覗いて細菌たちと戯れた。

(空間を漸次時間に換算し

政府は侵略の戦死者に名譽ある一片の勲章を

與えた。(生命を漸次領土に換算し)

×

×

やがて、街に 僕ら赤き瘦狼は充滿するだろ

う。

やがて、あの幕末の安政の大獄のごとき裁断

が頭上に下るだろう。

かくて暴風は地上の万象を破壊し破壊し、

盡して

見よノその後に来たるもの。営々と建設の黎

明が――

その日こそ 僕は瘦狼の假面を棄てて

春の街の群衆の円座に、ただひとり

しかも終焉の予言者のごとく寥然と入滅する

のだ。

〈昭和一〇年、ばく〉

インテリの霧

馥郁の ありとあらゆる媚態を吸収し 吸収して

いまし角砂糖の 己れ自らを崩壊する 哀れ毛細管現象

それはひたひたと甘く 愛しく
霧ふかき夜の 情痴の疲労に溶けて、
虚ろ——爽やかに 粧い艶めく黎明の訪れ。

宿酔の 瞼の裏を匍匐するインテリの霧。
(銃声・爆撃・突撃・ああ遂に占領すれば君が打振る肉体の白旗だった)

夢妙の 窓に漂れる 木犀の秘語。眩惑の卓に纏る 紅茶の愛撫。

ふと 羞恥と哀憐と侮蔑と、われら若き後悔にも似た一瞬の目配せに
人間の卑賤の習性は たちまちに妥協して

妻は 透魚のように 白銀のスプーンに戯れ、
僕は 花瓣のように 暁天のニュースを聞く。

それは

情痴ならぬ 朝現世の戦車の響。
飽くなき 殺掠の剣。淫しなき侵略の轍。眩るめく それら暴虐の戦場の
搾取の 圧制の 血沼の底に死んでゆく
職工や農夫たちの 蒼白い沈黙の凝視が……
ああ、あの重苦しい 忿怒の呻吟が……

強権の、ありとあらゆる悪業を吸収し 吸収して、

現世の 気鋭い罪科の毛細管現象。

やがて 己れ自らを崩壊するものの 跡に
営々と 弛まぬ 建設の 愛しき子孫たちの

爲に

いとも爽やかに 今朝インテリの霧霽れわた

り
見よ！

燦々と 光沢射す 真理の行手。

僕は 起ちあがって明粧の戸外に駆けでる。
妻は、僕のあとにつづく、兎の手を曳いて。

(昭和十一年、ばく)

掌上四季

新月淡く匂えど

獲物なき 獵人のごとく
疲れ 蒼ざめ 項垂れて
わが陰影は 夕昏の家路をたどる。

新月淡く匂えど

力なく 言葉なく
掌ひらくに 甲斐もなく
哀れ泉まる 貧家の瞳に
今日の日の 一粒の糧さえ示すによしなし。

新月淡く匂えど

まこと獲物なき 獵人のごとく
わが掌は 虚ろ佗しく 問わまほしけれど
友よ！ いましばし 怪しみ 懐しみて
さは深く たずね給いそ。

春は掌上に 花瓣の児ら 戯々として遊ぶにぞ。

夏は掌上に 烈日の姉 凜々として炊ぐにぞ。
秋は掌上に 霧雨の妻 切々として涙するにぞ。

冬は掌上に 雪景の父母 霏々として
枯木のごとく 永き歳月を踰りてもつたいなし。

ああ友よ！

今宵ふるさとの山嶺に
新月淡く匂えど
そを嘆き愛しみ 夢をたずねそ給いなそ。
合掌すれば

四季の風情とりどりに
愛情の雲 去来し
わが掌に、想うだに愉しき明日の太陽は昇る
にぞ。

〔昭和十一年、深苑〕

ひびき

悲鳴をあげて黑暗が崩壊れはじめる。
夥しい菌類が頭を擡上げはじめる
すると、小つぼけな旋風が湿地の此處彼處に
勃り

狂奔するあいつ。
氾濫するあいつ。
邂逅する、必然と、必然とが
いよいよ膨張する、上昇する、旋風。――

空間にスパークする
生きとし生きるものの 忿怒を 呪咀を
移動しつつ

けれども極めて正確に時間に換算するも
の、
例えば 貝殻類や昆虫達の零細な熱量にいた
るまで

漸次 展開する科学の頁に
始終その破壊の愉しさを如実に記録するもの
がある。

同志よ
やがて黎明ちかく
見よ 薔薇色の海の彼方を
羽搏きのような 足蹙のような
無数の肩と肩とが相剋のような
整爽な肉体の濤が響いてくるのだ。

〔昭和十二年、ヴァリエテ〕

美しき暴力

――あな慄し 絢爛として打碎く
天も落ちこよ 地も裂けよ、恋
久仁子の指輪も売りに――

爪は 耿として歳月の疵に点り
指は 抗として生活の嵐に刺り
掌は 荒として人世の穹に駢り
天譴の星 冬夜蔓延る悪徳の下界に墮ちて、
いまはずでに 紅花咲く要もなく
涯しなき曠野に 絢爛の情痴も壊滅するか！
紅玉の！

白皚皚 積雪の地底に凍て
その夜 拉森と 飢え迫る 肉親たちの囁き
嗟嘆！
爪は 指は 掌は
拗くれの 節くれの 皺くれの

われら

焰のごとく 巨樹のごとく 荒天のごとく

奪る！

掴む！

抛つ！！

隻つとして 紅玉の指輪

去らば 飢日の糧に打碎かんとする。

〔昭和十二年、日本詩壇〕

日本の忿怒

霧は雲と凝りつつ 薔薇色の黎明を粧い
低く 高く 次第に湧き昇るあの由々しい響
を聞いたか。

前夜を徹して 一睡の交睫もしなかつた。
忿怒のために あの光箭と降溜ぐ瞳の血気を

見たか。

暁陽の尚それよりも未く 千古の富士を発く

どうか

若き日本行動知識級群よ！

されど 祖国の このちぬられたる恍惚の藪
で

いつの頃よりか 淫邪の神々の飽くなき侵略
の播種が肇まり

ああ いつの世までか 搾取の收穫が 民臣
の口惜しい

祝祭が続けられるのだ。

妻は 愛しみの泪盡くるなき夜の葬列を――

子は 憎しみの焰消ゆるなき日の復讐を――

おお 敵よ！ 汝ユダヤ的世界の屠殺者よ！

累々たる同志の屍に口なしというなかれ。

その炎々たる忿怒のために 黎明なんと見事

な血雲が飛ぶことか。

〔昭和十三年、日本詩壇〕

月と虫と儂の饗宴

仄青い 紗羅の裳裾を

今宵も そつと

わしの枕べに ひろげておくれ

月光よ！

破畳 腹匍う

いたつきの陰影

その暗きをともに泣こうというのか

蟋蟀よ！

（それゆえに お前たちは訪ねてきたのか）

かくも骨蓋ざめた男の膝に――

去りゆく 青春の後姿を

追ってきたというのか、

うらぶれの足もとはよろよろとよろよろと…

〔昭和十三年、流域〕

消えゆく 愛慕の足音に
泣きあかしたというのか

問えつつ……

はた歎きつつ……

月光よノ

蟋蟀よノ

（それで、お前たちは夜ごと哀れになってゆ

くのか）

この男 アンニユイの捕虜の身と知るからに

窓に木枯し

庇に時雨

月の小鼓ととんと打ち

虫の横笛びゅうと吹く

幻影か？ いや夢路ならぬ 秋の夜の饗宴。

暁はまだまだ遠い

せめて酌うよ

熱い情けの盃に

酔うて舞うよ

お前もわしも

毀れた生活

私は

毀れた 古時計を修理している。

今日もまた――

戸外に 夜陰が墮ちて

雨は 虚しく 雪となる。

妻よ

じんじんと聞えてくるのは

まっしろな 人間の愛情の

降りつむ……

降りつむ……

倫理のひびきだろうか

軒下に 絡る（空間）と
朽壁に 汚つく（時間）の
寒々しい 観念の十字架よ。
たんねんに
解しては
組立て

組立てては またほぐし
.....

私は いったい
いつまでか
修理らぬこの古時計を
弄ってゆかなければならないのだろうか。

（昭和十四年、日本詩壇）

生活の門

獲物なき 獵人のように

とぼとぼと帰る 家路の暗さよ。

私は門に佇ちどまつて
そっと内を覗う。

障子には明るい灯の影動き

火鉢には熱い茶の湯ふきこぼれ

卓上には一輪の花と一壺の酒が

そして妻の優しい微笑みが今宵も

私の元気を足音を待ち侘びているのだ。

私は自分の表札をじっと見上げる。

大塚徹よ。

歳月の風雨に色褪せ

貧困の風雪に削られながら

一家の頭上に逞しく座して動かぬ

私の名よ

徹よ！

さあ、明日から

私は自分の名を昂然と仰ぎ

足音強くひびかせて

朝夕の この矜持高き生活の門をくぐろう。

（昭和十四年、日本詩壇）

春の雪馬鹿

破れ傘、巷に飢えて
味気ない春の淡雪、
思い出はみんなぼろぼろ
希きごととも千々に消えさり――

デカタンもやるならやらせ かつ壊せ、
その後に来たる真理の夜明け、
ポードレールの悪の華
咲くか咲かぬかこうどうじゃ。

この野郎、音ものう降りつむ雪の
べいぶめんと夕闇に
またしても またしてもうかびあがるは

にっぽんの自由と平和の明きまぼろし。

暴風のように どっとたかまるこの血潮、

何時に口火を剪るものぞ

足もとはよろけよろけして

あハハの穴あき帽子 泥の禿下駄。

泣くも 笑うも

今宵はゆるせ

心のなかの ふるさとの

わがゆく末に離れ住んで

痩せもやせたり妻も、子も。

どうせやせるなら かつ壊せ、

明日は英雄、今日は馬鹿、

雪がわが身の灰なれば

どんだん降れふれもつと降れ、

雪馬鹿野郎のちゃんりに

積りつもって朝がくる。

（昭和十四年、国民詩）

雪の夜の倫理

— 毒まんじゅう事件の判決の夜に —

春の雪、ふるよふるよ

あたたかくやわらかくふるよ、
夕ぐれを あかるくかるく

あしおとしのばせてふるよ、

ふるよふるよ 雪よ

わたしから逃げた恋人の髪に——

わたしを裏ぎった友人の掌に——

ふるよふるよ——（憎しみとはつまり愛する

ということだろうか）

春の雪、ふるよふるよ

涙のように

夕刊もぬれてふるよ

しょんぼりうなだれて

女囚の肩におもたくふるよ、

ふるよふるよふるよ あわれ九年の判決に

菊子の追想も

夜をこめて さみしくうつくしく

獄屋の窓にも雪は しみじみ訪うものかよ。

ふるよふるよ——（愛すとはつまり赦すとい

うことだろうか）

誰もたれもなつかしくみんな会いたい人ばか

り

憎まねばならなかったという——

犯さねばならなかったという——

ああ、にんげんの 赦し赦されることのない

悲しい運命について

罪びとは罪びとどおし寄って折れば

雪は 真実の道を証してくれようもの。

雪よふれふれ

にんげんよ死ね死ね——（赦すとはつまり死

ぬということだろうか）

この永遠の赦しのために

梅雨の窓

日本は大陸に血を流しているのか。

神も佛もなかぞらに

ふるよふるよ 雪よ

おまえがいちばん正しく清い

ふるよふるよふるよふるよ……

ああふるよ 春の雪ふるよふるよ

庭面に 窓に わたしの詩に……

ふるよふるよ せめて今宵を雪ふるごとく

妻も

匂え

粧え

卓に明るく水仙の鉢など点せば

心の汚もましろくほぐれて

ほのかにふくらむ愛情の蕾を温めようではな

いか。

（昭和十五年、日本詩壇）

いさかいしあとの虚白しき——

×

×

しらじらしきは

ふるさとの伝統

うっとうしきは

にんげんの絆。

恍として熱あり われのみ怒る。

×

×

ひとりの友は弾に斃れ

ひとりの友は獄に死す

梅雨の窓、セキズイの疼きに慟哭する。

×

×

ああ まぼろしの径はひとすじ——

病み呆け、霧ふりやまず ふりやまず。

生や 死や

あハハ そは 問わまほしく哀れにおかし。

〔昭和十五年、日本詩壇〕

死刑陰影

この法廷には
一人の傍聴者もない。

検事も弁護士も書記も 監守もない。
白昼であるか——深夜であるか——それもわ
からない。

裁判長である 老翁が

孤り 黙想として 端坐している。

——自らの暗鬱な陰影を囚人として。

風沙の崩れる音——寂けく——杳く

裁判長は一頁——一頁 刻明に調書をめくる。

〔産〕の日——難産にして逆児なりき

匍うの日——歩むの日——乳房を噛み 糞

尿を呑み

悪童にして爛漫。天才にして早熟。

朝に花鳥を殺め——夕に西瓜を盗みき。

日に月に荒猛の——かくて故郷に恐れなる

恍惚を撒きつつ……

耳を澄ませば——夜潮のごとく 盛りあがり

ゆく戦車の轟き。

おお老翁の額に燃えあがるもの。——若き日

の黎明の朱か。

雪解

鮎の腸 ほろほろと

舌を刺して 苦きは何ぞ、

濁り酒 ろんろんと

喉を灼きて 疼くは何ぞ、

昔の女と——逢いて

涙流せば わらわれむ。

〔現世の つれなき男 皆 平伏すという魔

法の筈 欲し〕

げに 幸うすき 女なれば

愛しくも 心嬌れる言葉かな

肺病みて異国——杳く——逃れきたれり

夫ならぬ 男 訪いしは

かりそめならぬ

生ける証なる 一瞬ほどの 歡喜なるや……

はたまた 永劫き悲哀なるや……

裁判長は深く瞑想している。——音もなく流
れやまぬ時空の……
咄ノ天譚の叱咤。——起立して自らの陰影に
判決する。

〔被告を——死刑に処す〕

〔昭和十五年、日本詩壇〕

妻ならぬ 女 抱きて
涙流せば 嘸われむ

ああ 醜聞は
大古より 獣めきたる にんげんの
愛しき性よ——栄ある習慣よ——
まして現身に

笑る絆の これやこの
相対ごとは
——夢 仇ならず。

涙よ

涙よ

ただもう 春は 涙に解けて……

生ける証ありし日の

今を限りの——恍惚の——涙流して

帰れ 女よ。国境へ——

稜の雪もほのぼの消えゆくならむ。

〔昭和十六年、日本詩壇・生活風景〕

いたつきの春

いたつきの わが肌に
垢は昔のごとくつみたれば
春風 あまたわきたり。

じんじんと熱たかく
セキズイの疼くあたり
終日 皮膚は痙攣するを

ただにわれ 腫として耐えんとするに——

これはまた

哀れにおかし

春くればとて

わが病む動き背筋を

風ら 眷属つれだちて 浮かれいづるよ

母の紐

夕べ

風もなく 音もなく

白い葩が散るので

母はやるせなかつたのであろう

若く 愛しく

青い眉 ほのかに忿らせて

杏の樹に 縛りつけた

悪童の

杏い——とおい 春の感傷であった。

戒めの 両手をあげて

杏の樹をゆすれば

ほろほろと 白い葩こぼれ 熱い泪こぼれ

ああ むらさきの母の紐よ

厨へに

味噌汁煮く匂いも

おぼろおぼろに

しらたまの 妻のお指に
ぼつちりとちさき音たてし……
その儚さは 虱か われか
春の夜の おぼろおぼろに
おどけたる命はかなし。

〔昭和十六年、日本詩壇・生活風景〕

悪童は

いつか——泣き疲れて眠ったが——

来る春に 住く春に

白い葩 咲かせつつ……散らせつつ……

杏の樹

朽ちていまは哀れに

母もまた 老いて

なかなかに忿り給わず

ああ 色褪せたむらさきの母の紐よ

悪童は

鬚も——強げに 戯らの歳月も教えて

夕べ

現なく 夢となく

まぼろしの 白い葩が散るので

母はひとしおなつかしいのであろう

古しえの 清く優しく

いまになお 青い肩 ほのかに忿らせて

杏の樹に縛りつける

悪童の

心に——暮れのところ むらさきの母の紐。

〔昭和十六年、日本詩壇・生活風景〕

晩秋老爺の像

いつの頃よりか

薄陽のなかに

目をほそめ

かすかに首を揺りい給う父なりけり

はらはらと……

はらはらと……

またしてもはらはらと

かそけきものは 落葉の気配——

父よ

汝は耳かたむけて 黙念となにを想うや

（——みはるかす 霞のなかの花の経 歩み

竹み仰ぎたる 雲白き故郷の山

うつつなのかの火虹いまも懸るや

——はたまたは とどろに猛き孟夏の日 挑

み争い航りたる 浪荒き異国の海

絢爛の檣燈いまも走るや）

崖のごとく

黝く削られし頬にぞ

芒なす鬚——そうそうと白銀にそよげる貌の

かぎりなく淨く 寂しく 尊くはおぼゆれど

光なきその瞳 いろ褪せしその唇

尖りたるその掌をあげて

虚しく叫び給うに

若き日の太陽——ふたたびは汝に返す術なけ

れ。

風白く 去りゆきければ

肅條と 時雨きたりて

この庭面 いちはやく冬づきそめにし

一匹の蛾

屈みたる その肩にとまりて

汚点のごとく動かず

父もまた ひっそりと坐して塑像のごとし。

〔昭和十六年、日本詩壇〕

振子

青い鸚鵡を尋ねて、七ツの海洋を航つ

たが、わたしは幸福のかわりに、深い

悔恨の傷心を得て、いま故郷の 白重

の時圭台に眠る。希望と絶望の振子を

聴きながら——

（夜から）

二人の 侏儒が

黄金の鍵で

十二の窓を つぎつぎに閉めてゆく。
じゃポーン ポーン ポーン ポーン……

もの倦い呪咀の聲音を響かせて
黝い地獄の夜陰が墮ちてくる。

蛇や梟や蜘蛛や、鬼火や幽霊たちが
深海の昆布のように 樹木を掻きわけて出没
する。

じゃポーン ポーン ポーン ポーン——
ながいながい昏迷の夜の 白亜の時圭台。
わたしはぐっすり眠りつづけている。眠り
ながらに—— 魍魎の匍匐する あの恐
ろしい心臓の高鳴りを数える。

〈朝へ〉

二人の 侏儒が
黄金の鍵で
十二の窓を つぎつぎに開けてゆく。
じゃポーン ポーン ポーン ポーン……

爽やかな 光の喊声をあげて

緑の朝が 五人の皇子に駈けつけてくる。

牛や家鴨や蛙や、陽炎や兵隊たちが

天国の花々のように 蘊郁といりみだれて踊
りはじめる

じゃポーン ポーン ポーン ポーン——
ああ響くひびく 白亜の時圭台が、まぼろ
しの 童話の時圭台が……夜から朝へ——
わたしは眠りより醒めながらに 手足を伸
ばす。蜻蛉が殻を脱ぐように その濡れい
ろの透翅を徐々に伸ばしてゆくように。

〈昭和十六年、日本詩壇〉

杳き暴風

海のかなた はろかに
とおざかりゆく 暴風

わが死は

かく静かに——かく寂しく——
雪雲垂るる 曠野の涯

述懐の 緑の裳衣 ぬぎ棄てて
慄然と 佇む

いっぽんの 裸木

かかるとき 漆黒の大鶴
夕昏の 枯梢に凍てて

——啼かず 翔はず

わが太陽は 虚しく
常闇の瞑府に沈む。

歳月とともに
友情の花束も 色褪せゆかむ。

わが死を歎く 背風らも

やがては めでたく この世を終えむ

かくて 後の世に

崎しきを訪う 旅人が

世に人にいれられざりし 詩人の

至福なるわが永却の 熟睡をさます杖もあら

じ。

その附近

紫のすみれなど ほのかに匂い

白骨は 青苔に露われて

纏纏と 響き

寥冷と 耀る

よろぬい 鬩ろう 墓標に

春風秋雨——ひそひそやかにめぐりめぐりて

水平線 かすかに

消えてゆく暴風のごとく

わが臨終は 孤り 微笑えみつつ

静かにしづかに——寂しくさみしくあれよ、
と。

〈昭和十六年、日本詩壇〉

わが墓碑銘

——いっそ私は忘れてしまいたい、私の現身の名を——

永遠を隔つとぼりが薄れてゆく時刻

わたしは聞いた 忍びやかな使いの足音を。

わたしの肉体よりは 現世の華麗な夕栄えが

消えてゆき

いま真夜中の棺に横臥つて わたしの聖靈は

もうふたたび覚むることなき憩いに眠る。

あまりにも深く 優しく 心輝くわたしであ

ったゆえ

神は病苦と貧困の嫉妬を肉体に架せ給うた。

風雨の穹の荒びも 生活の翳りは麗しく暗れ

やかに

轟く嘲罵の衝に住んで 微笑えみ報ゆるわた

しであつたゆえ

神は冷酷の恩恵もて 遂にこの生命をも召し

給うた。

ああ 醜草茂る荒廃の世に わたしは生きて

三十四年、

いまこそ愉し 諸々の煩悩に打克つ最後の苦

悶よ!

蒼ざめゆく額よ! 頬よ! 弱まりゆく眼ざしよ

! ああそれら永遠の自由よ!

屈辱と懊惱と悔恨の この肉体と精神はもう

わたしのものではない。

君たちあとに残る人間の汚れた肉体と精神を

もつものの

呼びつ歎きつ 怒りつつ いかにも激しく追駈

けるとも

冥府の闇深く わたしには人々の慟哭が聞こ

えない。

ぶらう・ぶらう・ぶらあーぶらう

燃える涙の鼓打たば

屍もういちど起ちあがれ!

ぶらう・ぶらう・ぶらあーぶらう

溢るる涙の笛吹かば

〈昭和十六年、日本詩壇〉

屍もういちど微笑えめよ!

ただもう返らぬ愚痴と詮ない愛撫を 真夜中

の棺に繰返し繰返し……

よよよよと歎きのたうつ眷属らの さながら

に獣めくを

怪しみ 懐しみ わたしの子は真夜を目覚め

て戯々と遊ぶ。

ああ萬世の英雄も 玉樓の住人も わたしに

は砂漠の幻影にすぎぬ。

夥しい悪徳の淫佚の 血みどろな相対の め

ぐる因果の

人間のふるさとは 忿怒と悲歎の明日につづ

く……

だともうわたしは いますっかり楽になった

のだ。

生命焉る癒癒の苦悶のあともなく

わたしは真夜中の棺に しずしずと永遠の憩

いに眠る

ぶらう・ぶらう・ぶらあ——ぶらう——。

明日の腕

管制の暗き燈下に

そと起きいでて

妻よ

肌ぬぎて汝は寒げに何せんとするや

くだつ夜の 白き腕に

深沈と膏業を塗るなり、

いたくもの憂げに動かすなる

汝の腕われを泣かしむ

セキズイ疼く夫に替わりて

防空の

昼夜わかたぬ激しき訓練に——

砂をあびせ

水をはこび

梯子の危きにのぼり

また担架などもかつぐという

妻の腕

男ならぬ その腕 われを泣かしむ。

わが眠りふかく寝返るとみせて

ひそかに拭うこれの涙を

妻よ

——しるや しらずや

ひとりしずかに起きいでて

深沈と

汝は明日の腕に膏葉を塗るなり。

〔昭和一八年、日本詩壇〕

交替

朝まだき茶の花畑を駆けぬけてきたのである

う

あのひとは東髪に白い葩を挿して

ほっと上気した頬に霜があやうく濡れそうだ

いちはやく夫を御国にささげて

もどからに黒い着物のよく似合う

虚しくさびしさをたたえた未亡人だったが――

紺縞のモンペをはきそめてよりのけなげさは

茶の花畑急ぐ手にふとも触れて

冷たく凍みいるような葩のま白さを

一枝折って髪挿すという――

心ゆとりのこうもいみじくあわれに

爽々しい慣しとはなつたものか

うすみどり梢々に明るく

紅さす暁の光ながら

むくむくと由々しい山雲のたたずまいよ。

朝まだき 眠りさめやらぬ児を婆さんにあず

けて

あのひとは大空の見張りの交替に

いそいそと茶の花畑を駆けぬけてきたのであ
ろう。

〔昭和一八年、日本詩壇、朝日新聞〕

昭和二十二年、日本海軍、豊田副官、
M.A.S. 111
このとき、日本の海軍は、豊田副官の
元帥として大東の海軍の文藝部
として、その活動の中心となつた。

昭和二十二年、日本海軍、豊田副官、
M.A.S. 111
このとき、日本の海軍は、豊田副官の
元帥として大東の海軍の文藝部
として、その活動の中心となつた。

III 放蕩息子(昭和二十二年〜昭和四九年)

昭和二十二年、日本海軍、豊田副官、
M.A.S. 111
このとき、日本の海軍は、豊田副官の
元帥として大東の海軍の文藝部
として、その活動の中心となつた。

昭和二十二年、日本海軍、豊田副官、
M.A.S. 111
このとき、日本の海軍は、豊田副官の
元帥として大東の海軍の文藝部
として、その活動の中心となつた。

秋

ぼかんとした
空だ
のっぺらぼうの
つつぬけだ

如是我聞

のう

風よ

無眼耳鼻舌心意
無色声香味触法

しんじつ

無如却以來
のっぺらぼうで……
三千世界がつつぬけで……

雪片よ（掌上に命絶えなん佳人よ）

花粉よ（陽に虚ろ宿酔の旅愁よ）
夕焼よ（あわれ髪の中の虱の卵よ）
落葉よ（ああ猿に喰われてしまった青春よ）

さて のう
儼も
ぼち ぼち
帰のうかや

（昭和二十二年、新漣）

献詩

— 姫路護国神社大祭に —

古巢^{かす}失^しき
つばめのごとく
戦災の街をはろけく
さまよい抜けて
呆と 仰ぎし

ふるさとの古城

夢にあらじか
そをめぐる 一帯の緑地
麓なる護国の宮居も焼けず

おもざわりき 今日をして

天都詔戸の布刀詔戸

薰風は朗々として言橋ぎ祭る

国難の鬼か荒御霊よ

祖国^{くに}敗れては

玉しき宮居

詣ずる人もまばらまばら

こは まこと憤ろしけれ

喪服なる若きおみなひとり

春惜しむくさぐさの花を献げて

涙 滂沱と暈るをみれば

いまははや くれぐれも鎮り給え

永久に 国護る神が和御霊よ

われも またひとり

古巢^{かす}なき

つばめのごとく

飢え 疲れては

ふと啄^つみし すみれ一花

廻^{まわ}郎^{らう}の一隅に そを置きて

蒼ざめし 戦災の街に

黄昏を さまよい帰らむ

（昭和二十二年、新漣）

杏

父母は あやまちにして 我を産みき

我またあやまちにして妻子もちぬ

霖^{あま}雨^り降れば 杏^{あん}は紅く熟するものを

あやまちの生命^{いのち}に昏^{くら}れて 窓に坐す

〈昭和二年、新湊〉

放蕩息子

東洋の

あおい囁りのなかにうづくまって
花守りの老爺は
この春——にせんろっぴやくろっペンの
としつきの花束を編んでいる

ほろりと熱いものが頬をぬらして

はっと気がつく

ああ 俺は泣いていたんだ

と、たちまちに嗚咽して

杳いむかしの花びらの

いちまい いちまいの儚さが

赤道越えて 帰ってくる。

傷つき破れた

神話のなかの

白い蝶が

おーい おーい

と 群翔ち

追いつがる

追いつがる

大陸のはての蜃気楼などに——

花守の老爺は

しょぼしょぼとメガネの曇りをふきながら

日本の夕景を飽かず見まわしている

春は 惜しみなく

くさぐさの凋花を棄てて

放蕩息子のように

背きさる

熾んなる夏の方向へ——

〈昭和二年、新湊〉

あやつり神楽

風の 手さばきが すこし乱れたばかりに
秋雨の あやつり糸が 千々にからまりか
らまり狂い

おまえがわたしやら わたしが誰やら 誰が

誰やら

〈びいひよろ びいひよろ ぼるんちやち

やか〉

雲のうへの 神々の 酔っぱらいちゃんの掌

が

ふるさとの あやつり糸を しどろもどろに

手繰るゆえに

尾がはえ 耳がうごき 牙をむく世のうたて

さや

〈びいひよろ びいひよろ ぼるんちやち

やか〉

笛ふけば 葉を落とし 度しくその葉を落と

し 敗日の

あやつり糸に だだに生きぬく いのちを托

し

裸に還る 樹々のところが愛しゅうてならぬ

なり

〈びいひよろ びいひよろ ぼるんちやち

やか〉

さて 生きて二人 星は二六 華は四〇

妖かしの あやつり糸の ふと晩年の抒情に

溺れ

柿囁めば 落暉冷え うたたねの恋のほろ渋

さよ

〈びいひよろ びいひよろ ぼるんちやち

やか〉

〈昭和二年、新湊・兵庫詩人〉

とじるのです。
みえないものがみえてくるのです
春雨のあやつり糸や、
深海のカオスのランプや、
星をついばむコロナの不死鳥や、
そして肋骨をさまよう夜更けの猿など、
だからとじるのです。
それらのみえないものがぐるぐるみえてくる
ので、
おまえと
わたしと
おそろしくなったり、
あるいはかなしくなったり、
どうしてもひらかずにはいられなくなるので
す。
だからひらくのです。
するとみんなみえないものに選ってゆ

くのです
それだからとじるのです。

四次元世界にひらくサクラの気配や、
九億年にばくはつする富士火山系など、
みえないものがまたしてもみえてくるのです。
ああ だから だから
ひらくのです。——とじるのです。
ひらくのです
おまえと
わたしと
おろおろうろたえ
ただもううろたえて泣きだしながら
とじてしまうのです。
ふたり抱きあって とじてしまうのです。
〈昭和二十二年、新潟〉

除夜の鐘

—美作のY女に—

きたくにの山の宿 雪ふりふけて
火桶にひとりペン舐舐さすりながら
わたしは深沈と除夜の鐘をきいている。

おどろおどろに戦勃り——
死生の旅に離れ住んで
おまえ 逢う日のよしもなかったが、
うつらうつらと戦熄んで——
幾とせぶりに除夜の鐘きけば
無頼の詩人 わたしにも
そんな故郷があったのか——と、つい泣けて
くる。

おまえ いま——かたくなの
夫の腕のなかに冷たくさめて
去日と今日を
——去年と今年におしひろげる
あのふかしぎな鐘の距離をきいているのだろ
うか。

旧瓶の——ともすれば
暗く消えもいる愛情の灯の
新玉の——明るさに鳴りつづく
あのもえあがる鐘の魔術をきいているだろう
か。

おまえ その刹那の時間に響きあふれる
永遠の空間を——
零時零秒を——
その不覚のよぎるたまゆらに
おまえ わたし いのちのかぎり
どきん——と 触れあった
あのうろたえた鐘の醜聞をきいているだろう
か。

きたくにの山の宿
——雪ふりやまず
火桶に異郷の燐くずれやまず
あ、深沈と おもいいちずに
除夜の鐘がなるよ なるよ。

〈昭和二年、兵庫詩人〉

肩

おしろいの剝けた巫女が四人
魚唇のように生臭くおどっている。

ふっといま リックサックの重さを摺りあげ
摺りあげる

宿屋の二階から 海の方をみると
防風林のなかが なにか不思議なもののように
に灯り

風が吹いてくるたびに 蚊柱のような騒めき
が湧いてくる。

今日 停車場にリユックサックを放置して逃げ
てきた

この肩の軽さが 妙にわびしく落ちつかず
いつか ふらふらと この町の祭礼に紛れこ
んでいったが――

びいひよろ
びいひよろ
ばるん ちゃかちゃか……

〈昭和二年、播磨文学〉

びいひよろ……びいひよろ……ばるんちゃか
ちゃか……

この田舎のお神楽に とほうもなく熱い塊り
が脹れだし

いまははやわめきだしたいような荒々しきで
まぼろしの肩の重さを摺りあげ摺りあげ
他郷の見しらぬ人混みをぐんぐん押しわけて
ゆく。

鏡とパン

もう死んでゆく友

鏡がほしいという

僕はコクトオのデッサン集を四十円で売る。

小さい鏡とパン一個とたったそれだけ。

ものを買うということが こんなにもしみじ
みしたものか。

屋根裏の夕ぐれ

電球が切れている

もう死んでゆく友が絶え絶えに待っている。

僕はパンを半分ちぎって友に食えという。

敗戦で牢屋からだされた重態の友を

担ぐようにして病院をまわったが、

どこでもオコトワリの冷たい宣告――

はにかむように やせた掌を

鏡にひらひらさせながら

友は僕をみてものうく笑う。

僕はあわててパンを噛み やたらに啞せて吞

みくです。

もうどうしても駄目か 死なさねばならぬの

か

友よ

〈見てみる きれいだろう〉

僕は窓に鏡をかたむけて月をうつして見せて

やる。

〈昭和二年、播磨文学〉

鶴還る

晩秋の大气を断つて

せいせいせいせい……

鶴の

あの一羽乱れぬ羽搏きを

夜明け
わたしはたしかに聴いた。

四十羽、五十羽……百羽……
鶴は

酷寒のシベリアを翔破して
今年 幾年ぶりに
まことよくも日本の山河に還ってきたことか。
想えば

戦に敗けた あとやさき——
アメリカ人は 戯れに鶴を撃ち
ニッポン人は 戯れならず鶴を食ったが、

それにしても
このふるさとの四つの島が
いまはもう すっかり明るく晴れて
瑞々しく粧ってきたとでもいうのか
冷害の 北の野末に
一片の落穂がひろえることか。
水害の南の海辺に

いかほどの貝類や小魚がついばめることか。

せいせいせいせい……
せいせいせいせい……
秋冷の羽搏きたかく
鶴は
それでも還ってくる 還ってくる。

戯れの銃口と
戯れならぬ 飢牙が
いまも枯声のそこかしこには
覗いているというのに
鶴は
まっすぐに首さしのべて還ってくる。

荒れ狂う シベリアの吹雪を衝いて
蒼黴い日本海の怒涛を越えて
百羽、二百羽……五百羽……千羽……
せいせいせいせい……
せいせいせいせい……
愛しみに高鳴る

鶴の

その若猛る羽搏きを、
その夢ならぬ羽搏きを、
わたしは聴いた。

夜明け
わたしは覚めながらに たしかに聴いた。
〈昭和二十六年、姫路文学〉

日本の灯

そのなかの一人が 突然なにか叫びながら
赤旗をふると、みんなまるで夢中になっ
て 病犬のように 赤旗の回りに群がり、ぐ
るぐるスクラム組んで革命歌を咆えはじめた。
引揚船がいよいよ日本の岸壁に近づくと、船
長は だめるように 故国の秋の蒼い山々
を指し、医者や看護婦や事務官や水夫達まで
が この途方もなく膨れあがる赤いスクラム

に 手をふって駆けよったり——悲鳴をあげ
て飛びのいたり——もう諦めたように 眩き
ながら遠くから眺めていたり——そのあげく
総がかりで やけにドラや汽笛をならしてみ
たりしてみてもかえって爆られたように 一
層火の玉は燃えあがり、ぐるぐるぐるぐる渦
巻きたかまってゆく……

やがてシベリヤ方向に沈んでしまふ あの
灼熱の貧婪な太陽のように、人間の感情を粉
々に噛み砕きながら いつやむともしらず廻
りつづけた こんな巨大な非情の歯車がはた
と停み ひっそりとしてしまふ永却の刹那が
ぼつかりと堅孔をひらく——甲板の黴い翳り
の底から、祖国ソビエトのために日本に敵
前上陸するのだ、慟哭するようなアクチブの
特殊鋼の音がひびいてきたが、ばらばらと数
名のものが拍手しただけで 今はがっかりと
マストの暗がりに固まって囁る者や、まだ暮れ
のこる西海の斜陽をぼんやり眺めている者や

急にそわそわと船室におりて、皺まみれな妻
子の写真をとりだして見入っている者や、も
うこのようにひとりびとりになると、ひとり
びとりが自分の汗を拭き、ひとりびとりの溜
息をつき、静かに苜を吸いはじめ、船窓を開
いて、そつと盗み見るように、日本の港のと
もしびをチラチラなつかしみながら、しみじ
み日記などつけはじめのだった。

〔昭和二十七年、日本詩壇・姫路文学〕

野分

とぼり とぼり
橋をわたっていった
母。

橋のむこうは
しらじらと

いちめんの 芒原
そのなかの
はてしない 一本径――

めくるめく

臨終の

落暉の方へ

とぼり とぼり

どこまで 歩いてゆくのであろう。

おかアさん

おかア――さん

それでも いちどは立ちどまり、

にどさんと 杳く小さく振りかえり、

孤り

暮れのこる山麓を曲がって、

ひらひらひらひらと薄く手をふり、

いまは まったく とぼり とぼり……

橋のむこうの

芒のなかの

昏い

深い

野分の涯に、

もう しよぼんと

母の背を見失ってしまふ。

〔昭和二十八年、姫路文学〕

城よ

いよう

城よ

どっかり座って

おまえはあい変らず威張っているナ。

俺が故郷を追われた若い日の

夏の入陽の逆光線に

おまえはすこし海の方へ肩をさげ

最後まで 見えなくなるまで

俺を見送ってくれたっけ

だがもう そんなに威張るなよ
おまえは剥製の標本のように
まったくうす汚れて
空っぽになってしまったじゃないか。

さて久しぶりに会った

ふるさとのなつかしい街の貌だが

片頬だけの悪どいメイキナップ

よくみれば あごもおでこもニキビだらけの

凹凸だ

その凹凸の水溜りに

でっかい食用蛙が飛び込んで

ぶるぶう ぶるぶう

善良な市民に泥をひっかけること再三ならず

だから人間族は べたんこべたんこ

やけに空腹を叩いては

此処に この真中に 厳しくも鎮座します

おへそなるものを誇示せんとするのであるが

哀れ哀れ まことにも あわれなるかな

毒の雨が 冷えびえとおへその穴を透して

肝の芯まで浸みこみ
紫の髪の毛が色褪せ ぐんぐん抜けはじめ
美しい血球がどどんと唄われてゆくので
だれだって よろけたり たおれたり
不意に起ちあがって 拳を空にふりあげたり
喚いてみたり 慟哭だしたりしたあげくのは
ては
けろりかんとバチンコの玉などはじいて
えへら……えへら……えへらえへら……
虚しい自嘲いにゴマかしてしまうのだ。

いよう

城よ

おまえも俺も いやに尊大ぶってはいるが
お互いにセキズイ傷害の片輪者で
そのうえ今はもうすっからかんの空っぽだ
今年も 羽根をもたぬ天使たちの妬みで
赤い鳥の羽根をむしって料理する
冷酷な季節がきたが
むしられた赤い羽根だけが

ひらひらひら 師走の街に乱れ散るばかり
かんじんのゴチソウは何処で誰が食べること
やら？

ものは相談だが 焼酎一杯で
教えてくれないか 教えてくれないか
そこはかとな焼鳥の匂いについ騙されて
はるばると帰ってきた

ふるさとの城の町——とある場末のスタンド
で

今夜 俺は酔っぱらいちゃんのへべれけだ。

いよう

城よ

やろうぜ やろうぜ
これでも俺たちがやっぱり生きてる証しだ
城よ
焼けのこったポロポロの親父よ。
〔昭和三〇年、詩と民謡〕

崖

世に高く著された老詩人と
世に熱く喧がれたその愛人と
南国の 秋ふかく
黒潮削る崖のうえを散歩していた

ばあむ・たあむ・ばあむ……

白亜の灯台をゆすぶって

波頭があまりにも蒼く高鳴りつづけるので

老詩人は 白日の杳い睡ざしでたちどまり

海の底の静かな永却の眠りについて想い沈む

のだった

その若く美しい愛人は まるで早春のセバ

ドのようにはしゃいで

“青海原を駆けぬけてみたいワ”

素足になって柵に跳びつき

“ホリゾントの光る雲が食べてみたいワ”と
唄うのだった

ばあむ・たあむ・ばあむ……

ばあむ・たあむ・ばあむ……

ばあむ・たあむ・ばあむ……

“太陽に機関砲を連射してみたワ”と激し
く接吻するのだった

セキズイ癒後の不自由な歩みを

すこし気どったふうにはききながら

「零に肉迫する恍惚よ」と

潮流にむかって呼びかけたいような衝動の刹

那

なにかしら ドキンとしたものが老詩人をふ

りかえらせたのだった

そこにはもうどこにも

愛人の その美しい姿は失われていた——

老詩人は なにごともなかったように

そっと あたりを見まわし

のろのろと柵をのぞきこみ

よろめいて空をみあげ

そしてまた なにごともなかったように佇ち
つくし――

やにわになにか叫んで 愛人の靴をひろい海
に投げ

がつくりと その掌をながめ

その夜々のいとなみの生命の秘密を愛しみ

その温もりをのがさぬようにふところ掌にし

て

まるでなにごともなかったように崖を去って

ゆくのだった

南国の秋は あわれに深く

陽はひっそりと海にかたむき

ばあむ・たあむ・ばあむ・ばあむ・たあむ・

ばあむ……

崖のうえいっばいに

夜の潮音がふくれあがり

ひろがってゆくだけだった

〔昭和三十一年、詩と民謡〕

タウル氏の幻想

ボ口に寝て

床づれ臭い

この タウル氏の

どこにそんな若々しい熱情が潜んでいたの

しょう

どんらんと血を吸いつづける

その痩せ腕の その蚊を

睨むように見つめている

タウル氏の 瞳の

どこにそんな生々しい幻想が沈んでいたの

しょう。

たらん・てらん・たらん……

たらん・てらん・たらん……

たららん・らん・らん……

梅雨はしつように雨もりし

蚊はどんらんと血を吸い……血を吸い……

やがて われとわが

血ぶくれして動けなくなってしまうのでし

う。

たらん・らん・らん……

オシリから血をしたたらせながら

それでもこいつは とことん血をしゃぶりや

めないことでしょう。

たらん・てらん・たらん……

たらん・てらん・たらん……

たららん・らん・らん……

いつか遠い祖先の夜にも

きつとそんなタウル氏が病んでいたのでしょ

う。

そしておなじそんな夜の雨もりが

今宵まさしくこの枕べに伝わってくるので

やっぱりその遠い祖先の祭礼とおなじように

蚊は飽くまで この呆けたタウル氏を搾りつ

くすために

どんらん豪華な血の饗宴がはじめられたので

す。

たらん・てらん・たらん……

たらん・てらん・たらん……

たららん・らん・らん……

それでも やがて のろのろと

タウル氏の片っぱの腕が

ひとしれず重たく動きはじめて

「喝！」

突如そんなようにこいつを叩き殺してしまう

にちがいないのです。

だからきつと そんな刹那の歡びに

この 病みおとろえたタウル氏の

瞳は大きくはればれと見ひらかれて

いまはただ そんな夜明けを

孫子の世の タウル氏の夜明けを

しいんといちずに激しく見つめているのです。
(昭和三二年、詩と民謡)

隕石の唄

—宮城道雄追悼演奏会のための朗誦詩

あの美しい不思議な音楽はどこから聞こえてくるのだろうか。

たしかにそれは 天界の星の光りのように清く、優しく、ひびきも妙に降りそそぐのでふるさとの人々は 恍惚と夜空を仰ぎ、夥しい星のなかの、ただひとつの星の東方の、その星の古く新しい調べを聞きすますのだった。

まこと、あの美しい不思議な音楽は星から聞こえてくるのだろうか。

怒りあるものは、おのずと怒りの拳を解き

歎きあるものは、おのずと歎きの瞳を拭う。
たがいの心に飢えるものもなく
かたみに驕り犯すものもなく
もろともに虔しく、永遠の平和について祈り
語りあうのだった。

あ、かくて、東方の音楽の黎明ちかく
かの夥しい星のなかの、ただひとつの星の
その星の、古く新しくひとときわ高く輝きわた

り
あまりにも和やかに
絨の調べも惜しみなく

よろずの国の旗々に降りそそぐので
アトム雲や、キャピタルの地階にひそむ
嫉妬ぶかい神々の、呪咀の剣が
たちまちに断ち斬る、星座の階調——

あわれ夥しい星のなかの

ただひとつの巨大なる星は傷つき流れ
哀悼の光芒を永却に曳いて

ひとしれず虚空の開ふかく陸ちていったが——

私は渡ってゆきました

前も後も、上も下も

まっくら闇の中に

ながいながい橋だけが

ぼつかりと、明るく浮いて見えるのです。

おびただしい人の群れが

みんなおなじ方向に歩いてゆくのです。

幼児らの花はほほえみ

少年たちの小鳥はうたい

私は、歩きながら

ばんばんばんと橋の欄かんを叩きました。

すると、池や森のかげから

恋人や友達や同志らがあらわれ

踊ったり——酔っぱらったり——

あるいは、ひっそり寄りかたまつて

反逆の詩など、橋板に刻みつけるのです。

またあるとき、私は、燃えさかる太陽と

あの美しい不思議な音楽はどこから聞こえてくるのだろうか。

いまはもう、それは天界にまたたく星の調べではない。

鉄路のほとり——草むらふかく——

われわれのもっとも身近に奏じられた隕石の

うたではあるまいか。

われわれをもっとも愛しみ祈らせる、隕石の

うたではあるまいか。

(昭和三二年、詩と民謡)

(板谷隆一伴奏・黒川録朗朗誦)

橋物語

橋が見えます

橋だけが見えるのです

その、橋の上を

あいつら豚族めがけて投げつけました。
太陽は 微塵に碎けて

赤赤な星々が
橋いっぱい に 降りそそぐのでした。
やがて あいつの番犬が

私を見つけて追っかけてきました。

私は 橋材の裏にかくれました

……かくれながら逃げました

逃げました……ただもう逃げました。

風の 橋の上を

いつか 私はしよんぼりと歩いていきます。

ふっと 身ぶるいしたり

恐わけに うしろをふりかえり

にやにやと あたりを見まわしたり

まるでもう 阿呆のように

手錠をならして 歩いてゆくのです。

どこか 花の都の豪華な一室で

国際戦争製造業者たちが密談し

ぼうだいな大砲や戦車や軍艦や飛行機など

国に 血なまぐさい大人の玩具をばらまい
たので

四方八方に悲鳴がおこり
すっかり飢え傷つき みんな死んでいったも
のです。

やっと ヒロシマ ナガサキの悲劇のはてに
平和がかえってきたというものの……

この私には 哀れ牢獄の空白あるのみでした。

その空白の 橋が見えます。

いまはもう その空白の 橋だけが見えるの
です。

(あとがき)

突然 私は なにかうろたえて

立ちどまろうと 身もだえするのでしたが

あの橋の向こうに

まっくらな闇の中へ

もうしびれてしまった この足から先に

ああ のろのろと 私は 吸いこまれてゆく
のでした

(昭和三六年、天笛)

碑裏咒文——繁市の詩碑に贈る

人に告ぐべき

寂しきにあらぬ

ゆうぐれ一人杜にきて

しみじみと樹をゆする

泣けばとて

かえるものかよ

告げばとて

癒ゆるものかよ

しみじみと樹をゆする

植原繁市

生きている身に

建てられた

おのが詩碑の感激を

啄木は識るまい

そのよろこびは

賢治にも判るまい

それにしても

生きている身に

のしかかる

おのが詩碑の

この冷やかな

重々しさはどうだ

啄木とてもちろん

賢治とてこれに

覚えのある筈もない

これはもうやっぱり

人に告ぐべき

ものではない

ゆうぐれを

ひとり杜にきて

しみじみと

樹をゆすらねばならぬ

ああ生命の

あるかぎり

繁市は

しみじみと

樹をゆすりつづけねばならぬ

〈昭和三九年、兵庫タイムス〉

人間族の危機について

みよう みよう みよう みよう

噴火島で鳴くのは 海猫だけではない

鳴動するセキズイの疼きに

夜も昼も 私は泣きつづけている。

みよう みよう みよう みよう

海猫は鳴くだけで その目は濡れていない

床ずれ十年——私は老残の涙流して

哀しい国々の地図をシートに描き分けている。

みよう みよう みよう みよう

血生臭い太陽が 海峡に屍体を葬ると

ぬっぺらぼうの兵隊幽霊が 水平線をうろつ

きはじめる、

お化け其が 夥しい毒胞子を撒き散らすので

……

みよう みよう みよう みよう

海猫よ、もう鳴いてばかりではいられまい、

心平よ、二十才になった息子よ、

死に近い父は、ねんごろに一言だけ話してお

きたいことがある。

〈昭和三九年、城壁〉

迎春の姫路城

あらたまの 朱の光りを

天守閣にあつめて

姫路なる 白鷺の城は

いまおらかに

新粧の翼を 原始林の上に展げる。

想いおこす ふた昔——

かの暁の空襲を 劫火の街を

その時 わたしは見た

一望灰燼の 天に

まさしく翔びあがった 不死鳥の城を。

ああ遂に 焼けなかった

ふるさとの 城を仰いで

みんな泣いた 泣きながら みんな誓った。

いちはやき平和を よみがえる建設を

営々十年——それは奇跡のように

さらに十年——あれはもう伝説のように……

生命の 炎に洗われて

永遠の 若きよみがえるという

かのフェニックスさながらに

一九六四年——あらたまの古城をめぐって

弥栄に 輝きわたれ

大姫路 大播磨工業都市群。

〈昭和三九年、毎日新聞〉

詩と死の証

繁市も逝けりことしの除夜の鐘

なにをか言わんや

いのちの秘密 死と詩の真実

幻身 われ なにか言いて証し得んや

ひたぶるに心危しく 酔わまほしく
いたつきの 臥ながらにして酒のめば
おりからに 除夜の鐘
五蘊の響き 劫闇に消え
哀れふたたびは 還らぬいのち

霊あれば 証せよ
うからやからの夢に來て
繁市のいのちの秘密 証せよ
繁市の死と詩の眞実 証せよ

〔昭和四六年、植原繁市遺稿集〕

いたつき心経

(一部)

摩訶
まぼろしの
六十年

般若の
星の
祈るとき
十指の
枯木
天を指す、
妙妙
病み呆け、
己れ
微塵の
虚しさよ。

(二部)

床擦れの膿を絞れば
除夜の鐘がなるよ
煩悩もろもろに勃り、
病根いよいよ膏肓に入るとき
ごうん……ごうん……
五蘊は皆空なりと響鳴して
永却の暗闇に消滅してゆくのである。

(三部)

あき子はもう私の女房ではない
いまはまったく私の阿母さんである。
それにしても痛い痛いセキズイの正月、
掲諦ぎやていと哭いて
小児のように寝がえりすれば
見えるところに 葉牡丹が活けてあり、
手のとどくところにミカンや餅など
時としてあき子は焼酎のコップなど置いてく
れたりするのである。

〔昭和四九年、詩集・花と猿と〕

吐息の幻想

—又はアンデルセンの遺書—

それにしても 花の汁は生臭く
数をよんだら 四茎

小供は 全部で五人
いったい 黄金の薔薇は誰が盗んだのだろう
花畑の向うは 海、
泳ぐ 天才の 早熟の 孤独の
青い 十六辨の花を翳して
溺れたが、崖の上の空は とても明るく
風に びらびら 光って漂れた
白い 眞昼の蝶々——
ふるさとの 母の 耳たぶだったに違いない。
深夜の都会で ゆくりなく
拾った花、二十三番街の あの花は
尋ねる 黄金の薔薇ではなかった、
すでに人の世の いやらしい種子を孕むと
泣くか お前愛しくも愛しい花の 宿縁よ、
赤い 暴風雨は 時を越えた
盗まれた 杏い日の まぼろしの眞理を追っ
て……

氾濫する 血河の

咆哮する 世紀の
相尅する 歴史の

岸に、風に、草に、君は
たった一つべんでも 黄金の薔薇が咲いた、
とでも言うのか？
あ、太古より 大陸では戦争がつづいてい
る

でも やつぱり 人間は勝たねばならぬ
走馬灯は廻る 怒り悲しみ奪い侵され……

旅に病んで三十路の山麓

夢は寒々と 花の咲かない花畑、

掌は すっかり萎びてしまったし

背に濡したものは

まだまだ 堅い薔ばかり

もはや夕昏れは 蒼茫と額に蔭ってきた。

天使は 降りてくるだろう

やがて 盗んだ黄金の薔薇を返しに

時を刻む 心臓が停り

永遠のくらやみが 覺もなく忍びよる
終焉のときよ！

されど 嚴肅に詩人は叫ばねばならぬ

「汝 その花 偽りものよ」と

そして てんてんと血の唾を吐きちらすのだ

枯れた花畑への遺書には、

「死は太陽より東に、雲より赤く輝やかに、
と。」

〔未発表〕

自殺

——にあらずとはおもえど——

たそがれの町はずれ、木の葉ちる橋のもと

病み飢えしセパードの 今日も冷たく土に伏

しいぬ。

蝕まれしかか肌のおるぶると慄え

脱落の風にとぶ毛も いまにあらなく

軍犬の草もいたく錆びては

さだかならねど それとしらるる首輪の黝、

風哭く 瞳のみうつろに淨く

落陽に杳きまぼろしを追うや。

この日頃わがうらぶれの町はずれ

ゆうべゆうべのそぞろ歩きの橋のもと、

ひとときのパンわかちあえむ慣わしの

われとわが愛しみの日々につる

足おとをすでにさととりて二つ三つ尾は振れど

首垂れて瞳ひらかず

てずからのパンも食わずなりいぬ。

あ、如何にかかるためし世にはなりしや、
敗日のきびしさに耐えて

泣かじと誓いしことの いまは泣くべし、

熱き涙もて聰らの獣ぬらしてあれば

瞳つとにひらきてその身がぼと起き上がりぬ。

あ、されどかかるしるしの世にはありしや、

この犬のしばしばわが顔みあげてありしに

やがてふらふらと路上に歩みだしぬ。

たそがれの町はずれ、木の葉ちる橋のもと、

あ、思わざりき かかる真の世にはありしを、

ふとたちどまり またわれを振りかえり

おりからを とどろきわたたるトラックに

あわれ おのれよろよるとよろけこみたり。

〔未発表〕

小曲

小曲の曲調は、古くは民謡や
田舎の歌謡から採られたもの
が多い。その特徴は、リズムが
単純で、メロディが優美な
点にある。また、歌詞は、
生活の情景や人情を描いた
ものが多く、聴き手に親しみ
やすい。小曲は、日本の音楽
文化の重要な一環として、
多くの人々に愛されてきた。

小曲の歴史は、古くは平安
朝の和歌や、室町時代の
民謡にまで遡ることができる。
江戸時代には、町歌や
田舎歌として盛んに歌われ
てきた。明治時代になると、
西洋音楽の影響を受け、
より洗練された小曲が
作られるようになった。戦
後には、民謡復興運動の一
環として、小曲の創作が
盛んに行われた。現在では、
テレビやラジオを通じて、
多くの人々に知られるよう
になった。

小曲の曲調は、古くは民謡や
田舎の歌謡から採られたもの
が多い。その特徴は、リズムが
単純で、メロディが優美な
点にある。また、歌詞は、
生活の情景や人情を描いた
ものが多く、聴き手に親しみ
やすい。小曲は、日本の音楽
文化の重要な一環として、
多くの人々に愛されてきた。

浄慕の小曲

吐美江くんにおくる

浄佳きひとを恋ひて

さむざむと樹皮をなづれば

さむざむと樹皮はこぼれて

きよきとげの掌に刺さるよ

きよきとげに心さされて

しみじみと樹幹をゆすれば

しみじみと樹幹はゆれて

きよき木の実は肩をうつよ

きよき木の実に心うたれて

もくもくと星をあおげば

もくもくと星はながれて

きよき夜露はほほをぬらすよ

〔昭和五年、現代文芸〕

惜春

ろんろんと燃ゆるは
ほのかなる 白ろう

春 ふかく

羽すき透る青き蛾の

命かなしく より集う

ろんろんと 燃ゆるは

ほのかなる はくろう

春 とおく

羽青き蛾の墳墓に

愛しく はかなく 燃えつくる

〔昭和四年、現代文芸〕

秋はしろい

― 帰郷のうたのB ―

紺青のそらに

種花の匂を撒布して

あしたの食卓にうつる秋はしろい

まれにみる

ふたりみの朝は

からりと割った鶏卵のうつつわに

しんせんな食欲をもち―

愛は雲のごとくひろがって

ははとむすこに

もく／＼とふるさとの秋はしろい

〔昭和四年、現代文芸〕

おもいでの唄

ふるさとの

柳影の白壁に、

おもひではすすけた洋燈をともす。

……お母アさんの阿呆……

幼さに叱られて、

涙で戯書た 土蔵のしらかべに

夕焼は二十年の昔に映じて

森を道く、曠野にた、ずみ、

はろかに山頂のけむりを仰み―

あ、 たそがれに

はるばるとかへれば

ふるさとのランプの村はかなしい。

〔昭和四年、せふり〕

淵んだ夜

さりんさりんさりん
水色の小児たちは
たてごとを弾いてはしゃいでゐる。

今宵は月が細いので
月の友達をみんな潤んでしまう。

私はあわび貝のやうに疲れて
満月の夜を夢みている。

さりんさりんさりん
かもめは翼に面をうずめて
たてごとの顔音に泣きぬれている。

〈昭和四年、泉〉

双葉

朝顔の種子を埋めしに
土砂をはらいて
ひそやかに のびあがる
生毛のごとき

双葉をだせり

双葉はまだ開けず
葉末々々に そばくの土塊をいただき
敬虔しく 合掌するは

愛しき童子の
祈りのすがた

双葉は まだなよなよし
されど 陽滴に 雨滴に 育芽み
蒼穹に 伸びあがる

巨樹のごとき
気難にみたり

〈昭和四年、白揚〉

梅の実

くらき空に
みゆる
青き木の実

杖ふりて 打ち
仰ぎみ
しばらく 待つ

まず落すもの
つゆと
葉と 木の實と

くらき空に
あおき
木の實をひろう。

〈昭和四年、泉〉

いたつき

病みてあれば
心かよわくなりしかな

はろかなる
ひとをしたえば うつつつと

うつせみの
わがみおもえば しみじみと

いつしらに
冷えしミルクの 銀の匙――
いたつきの
かよわきわれとなりしかな。

〈昭和五年、愛誦〉

草にかくれて

草にかくれて
小石をほうりこむ
たそがれの水面に
波紋は ゆれひろがりきえる

草にかくれて
恋の唄をうたう——
真赤な月がのぼって
藻の花はしっとりとぬれてくる

草にかくれて
おんなどあそぶ——
情慾に醺酔れて
魚の瞳がじつとのぞいている。

（昭和四年、現代文芸）

民謡

割ってみしようか

割ってみしようか
この青竹を
すんなり長い
この節々を
わってみしようか
これこのとおり
おまえ いとしい
わたしの ころろ。

農家閑散

ばかり
ぼっかり
藁小屋に

ころり
陽だまり
春だまり

俺らは
日和見
ひる寝ん坊
ころり
春だで
ひる寝ん坊。

（昭和四年、猿）

姫路魚町情緒

姫路 魚町、鮫な町
だらり、木履 口の紅

舞妓の笑くぼの 可愛いこと

（旦那はん 蜜豆買うてくだん）

姫路 魚町 意気な町
つぶし つま下駄 抜き襟紋
芸者の素足の白いこと
（旦那はん ほんまに内緒だっせ）

ほれたんだらう

ほれたんだらう
ちゅんちゅん雀
あかい椿に
よりそつた

はずかしいんだらう
ちゅんちゅん雀
花にかくれて

ちゅんと 鳴いた。

（昭和四年、猿）

かもめ

胎んだ腹なら
腹でよい
かもめ飛べとべ
波ア光る、

ひかる波なら
波でよい
沫きや舳に
虹が立つ、
朝たつ虹なら
虹でよい
かもめ、気にすな

すく消える

〔昭和四年、猿〕

米作り

やれやれやつと 収穫た、
俵につめて 積み上げた、
納米はたかいし 売米や安い
二三が六俵 ままならぬ。

ずっしりどんと 苦勞した
血汗流して 働いた。
瑞穂の国の 米作り
米こしらえて 食いかねる。

〔昭和四年、文芸〕

こんぶほしほの

昆布干場の
春の白昼
昆布ほしほし
うっとり

カムチャツカ風で
大漁で
好うさん達者で
賭うけてか——

ほんにはろぼろ
とおい寄
せめて白鷗の
便りなと——

こんぶほしほの
れんげ草
二輪さいたに

姿やひとり。

〔昭和四年、現代文芸〕

背戸の畑で

背戸の畑で
ナア おまえ
そつと逢う瀬を
楽しんだ
あの時きや 今から
二昔

今じゃ倅が
ナア おまえ
そつと忍んで
出るそろうな
それもよからよ
すいきかそ

〔昭和四年、現代文芸〕

戻り船

港出るときや 湿気模様
沖気風だで 気にしたが
帰りや潮風 播磨風
ササ ギツコン 播磨風

さても夕焼 日和紅
いわし大漁で 日がくれて
重い櫓を押しや 気はあせる
ササ ギツコン 気はあせる

節磨港の 燈明様よ
どうせ船路を 照らすなら
共に大漁の 幟り旗
ササ ギツコン 幟り旗

とても疲れて 戻り船
あれは港の 迎え灯さ
せめて曳船 たのむぞえ
ササ ギツコン たのむぞえ

〔昭和四年、文芸〕

赤穂御崎情歌

赤穂みさきに
よす浪は

なみは

さらさら

すぐ消える。

主さの逢えに
くる夜さは

よきは
しみじみ
すぐ明ける。

〔昭和四年、文芸〕

菜ッ葉服のうた

あつしア 菜ッ葉服

菜ッ葉ッぱ

給料日は 給料日は

お恵美須様よ

牛肉で酒らアな

あつしア 菜ッ葉服

菜ッ葉ッぱ

日曜日は 日曜日は

阿弥陀様よ

姐あねね可愛いと遊ばアな

あつしア 菜ッ葉服

菜ッ葉ッぱ

月曜日から 月曜日から

地獄の鬼よ

釜かまたいて稼かせがアな。

〔昭和四年、文芸〕

杏あんずの花

おしえてやろか、と
だまされて
はかのう散ちったもの花、
かわいいやつだと
ほめられて
友禪更紗ゆうぜんさらの帯解いた、

だれにもないしよと

言うたひとに

解いたべに帯かくされて、

泣くんじアないよと

ふたりつきり

いいことした夜よのもの花。

〔昭和五年、現代文芸〕

おかよ可愛いと

石の地藏いしのかうざいでも
お飯いんま供くえて
お拌まみや利りやくも
あるだろに
おかよ可愛いと

柳買うてそえて
おがんでみたが
知らぬ顔。

〈昭和五年、現代文芸〉

まつかさ

日暮れ松實

肩に落ちよ

せめて、可愛い娘の

肩に落ちよ、

肩におちたりア

松かさ果報

そつと、その娘に

ひらわれよ。

踊り忘れた

おどり、わすれた夜でこわす
唄もわすれた雀でこわす
ただく、辛い浮世でこわす
涙でわすれた恋でこわす。

いらぬ世話だよ

いらぬ世話だよ

朝たつ虹は

いつもそわそわ

三太さんを帰す。

裏山かけた

朝たつ虹は

なんできれかる

涙でぼけた、

薄情ものだよ

朝たつ虹は

三ちゃんかえして

すぐまた消える。

〈昭和五年、風と雑草〉

雪割草

死んぢまうよと おどかして
じらしてやるかな あん畜生
こりたく、というまでは。

〈昭和五年、風と雑草〉

情夫ができたよ

情夫ができたよ うそつこに
にげてやるうかな あん畜生
つらいく、というまでは、

尼僧になるよと 狂言に

かくれてやるかな あん畜生
たのむく、というまでは、

思い出したとて

酔った酔ったよ 定男さん

いつか咲いてた 雪割草を

妾ア 酔っぱらって

夢にみてないた。

夢にみたとて

酔った酔ったよ 定男さん

とうにわすれた 雪割草を

妾ア 夢にみて

しみじみさめた。

さめてみたとして
酔った酔ったよ 定男さん
雪は消えるし 雪割草も
しよせん しぼんだ
むかしの恋よ。

〈昭和五年、風と雑草〉

捕鯨射手の唄

板子一枚
いのちを的に
鯨射とうか
あん娘を射とか
おちゃのこ ちゃのこ
もり射ちア ちゃのこ
意地だ いくじだ

いのちを的に
恋のもり射ちア
鯨はおるか

おちゃのこ ちゃのこ
あん娘も ちゃのこ

一心 祈つて

いのちを的に
鯨射とうぞ

あん娘も射とぞ

おちゃのこ ちゃのこ
大漁じゃ ちゃのこ

〈昭和五年、現代文芸〉

ざつくばらんに

ざつくばらんに 下手な字で
あんちきしよ可愛いと 下手な字で

惚れたと書いた 気をつよさ

ざつくばらんに 胸のうち
あんちきしよ可愛いと 胸のうち
逢つて話そと思つたに

ざつくばらんに 逢つた夜の
あんちきしよ可愛いと 逢つた夜の
うすれ月かよ 気のよわさ。

〈昭和四年、泉〉

当生恋愛講座

名刺がわりに 印刷ずりの
恋文わたして チヨナ チヨナ
今宵は涼しい
ちよなモンサ

返事がわりに 偽いダイヤの
指輪をみせて チヨナ チヨナ

あ、ら良い月
ちよなモンサ

そこでお兩人 意気投合と
一と晩おどつて チヨナ チヨナ

あっさりさよなら
チヨナもんサ

〈昭和四年、泉〉

すつちよんちよん

とんとん からから
毛織つてくらす
むすめ とんから
やつれてくらす

織場のすみの
すつちよんちよん

むこさんほしいと
啼いてくらす。

〈昭和五年、楽園〉

鶯

増位いざゐに

梅の花瘦うせせた

姫山みぞれて ホーホケキヨ

とんと白鷺しらぎの城しろあ見えぬ。

鶯うぐいす春はる雄おは

とぼしめて瘦うせせた

月つきが沈しずんで ホーホケキヨ

花はなが散ちりるよな夢ゆめをみた。

妻つまの歌うた子は

口くち癖くせぐち瘦うせせた

今度いまどの浮世うきよにや ホーホケキヨ

葩はなの山やまほど抱かかいておいで。

死しなばもろとも

死しぬ気で瘦うせせた

お手て々々つないで ホーホケキヨ

蛇へびのイチゴ食くつて血ちを吐はいた。

〈昭和六年、愛誦〉

白鷺しらぎの唄

波止場はまし娘むすめに チョイ だまされて

船ふねはでるでる 煙けむりあのか

あ、チョイチョイ あ、チョイ

のこる煙けむりに チョイ 白鷺しらぎむせて

扇あふぎ港みなと蒼あざいと いうて啼なく

あ、チョイチョイ あ、チョイ

ないてむすめに チョイ 咄はなわ

死しんでやろかなと 白鷺しらぎあ思案

あ、チョイチョイ あ、チョイ

思案しあん日暮ひぐりれて チョイ 醉よめさめて

淡路島たんろじまかげ 潮うしほあさむい

あ、チョイチョイ あ、チョイ

寒い潮風しほかぜ、チョイ 憂世うれよ風

どうせルンペン 渡り鳥

あ、チョイチョイ あ、チョイ

ルンペンルンペン隨まなら チョイ 白鷺しらぎでよい

お月おつきあ、お月おつきで かけら月

あ、チョイチョイ あ、チョイ

かけらお月おつきさん チョイ 夢ゆめにみて

明日あしたはホンコン 夕ゆふ焼やきか

あ、チョイチョイ あ、チョイ

〈昭和六年、愛誦〉

捕鯨とくじやう小唄

あん娘あんな桜さくらの 花はなしぶき

イヤサ 風かぜだよ

九十九里くじゅうじゅうりヶ浜がはまうすがすみ

ドウデモコウデモあん娘あんなのちヤツちや

見よというたとて はずかしい

イヤサ 沙すなふく

夫婦夫婦鯨くじやうじゃないかいな

ドウデモコウデモあん娘あんなのちヤツちや

船ふねべり叩たたいて 酒樽さかづきぬいて

イヤサ 目出度い

今朝は捕鯨の船がでる

ドウデモコウデモあん娘のちやツちや

かもめ素足で なぜにげる

イヤサ ないしヨで

沖の鯨に告げまいぞ

ドウデモコウデモあん娘のちやツちや

あん娘おどれや 日は燃える

イヤサ 俺いらも

鉄砲背負ってひとおどり

ドウデモコウデモあん娘のちやツちや

〈昭和六年、牧笛〉

桜鯛初漁踊

淡路 岩屋町 ヨーイヨイ

ヨイヨイ 鷓崎の ヨイ 沖で

春は目出鯛 ヨイヤサノホイ

鯛の鯛の鯛の 初便り

臘月夜に トーロトロ

トロトロ 春の トロ波に

惚れて来たのか ヨイヤサノホイ

鯛の鯛の鯛の さくら鯛

本場 沼島あ ウーラウラ

ウラウラ 若衆の ウラ 踊り

五智網 縛網 ヨイヤサノホイ

鯛の鯛の鯛の 初漁節

美人釣る 鯛釣る ユーラユラ

ユラユラ三月 ユラ 三日

三人の漁師が、ヨイヤサノホイ

鯛の鯛の鯛の 三番叟

陸の土産にや アーカアカ

アカアカ 紅の 赤帯の

あん娘好くよな ヨイヤサノホイ

鯛の鯛の鯛の 派手模様

〈昭和六年、現代文芸〉

死ぬ気で

— 晃子さんに —

加古川の母のお情け

強気で捨てた

ぼんと小石でも 蹴るように

二十一の恋のうしろ髪

ぶつり断った

細い糸でも切るように

女でも見張や連絡

ピラ撤きアおろか

死ぬというなら 死にもしよう

タワリシチ 死ぬ気でいるのに

帰れというの

まるで小児でも、さとすように

ブチブルの 恋も浮名も

薄れた夢よ

ちよいと朝たつ 虹のよに。

〈昭和六年、牧笛〉

待ちぼうけ

恋の頭文字

さらりと消して ヨウ

浪は波止場を

逃げてゆく

ええ しょうがい 三日も 待ちぼうけ

あきらめましようか

砂ほりましようか ヨウ

砂に涙を

埋めましようか

ええ しょうがい 五日も 待ちぼうけ

悲しまぎれに

小石を蹴れば ヨウ

磯辺蛙が

とんでた

ええ しょうがい 七日も 待ちぼうけ

蛙 蛙と

帰りもせずに

おぼこだました

船長さん

ええ しょうがい 十日も 待ちぼうけ

憎くや恋しや

帰らぬ人を ヨウ

港の月見りや

思いだす

ええ しょうがい 二十日も 待ちぼうけ

月の甲板で

別れたキスを ヨウ

忘れないでと

泣いたのに

ええ しょうがい いつまで 待ちぼうけ

〔発表誌、年月、不明〕

プロレタリア子守唄

ねんねほろほろ ほろろっとな

夢は牡丹の花ざかり

風もそよ風 ねむり猫

小鳥ア小鳥で びいちくり

〔昭和六年、牧笛〕

ねんねほろほろ ほろろっとな
せめて寝た間の 後生楽
さめてりあ長屋の 屋根の裏
もとのもくあみ ぺんぺん草

ねんねほろほろ ほろろっとな
この児の父ちゃん マルキスト
鹹切り反対 サポタージユ
デモで爆発って ストライキ

ねんねほろほろ ほろろっとな
ぺんぺん草でも 花は咲く
ルンペンおけらも 五分魂
ましてプロの児 かたきうち

ねんねほろほろ ほろろっとな
憂世乏しゆて 飢じゆうて
かてて辛気で 寒むござる
せめて夢の間 うらうらと。

田螺の唄

泥田の 泥田の 田螺どの
小手をかざして なんじやら ほしい

湯卷アひらひら逃げこんだ
毛脛アあとから追っつけた
とうきび畑が さーらさら
いやさ秋風 鳴るがいな

泥田の 泥田の 田螺どの
首をのばして なんじやら ほしい

湯卷アきびの根につまづいた
毛脛アとうとう追いついた
増位のお山が ゆーらゆら

いやさ夕焼 燃えるがな

〔昭和六年、現代文芸〕

播磨鯛漁節

牛島曇れば風となる

沖出風なら雨となる

度胸だめしだ なんのその

ヤレ漕げ ギッコン

命の瀬戸よう 播磨灘

鯛場 鯛網 鯛漁だ

男伊達衆だ 八人だ

八丁櫓そろえて なんのその

ヤレ漕げ ギッコン

命の瀬戸よう 播磨灘

意気だ いのちだ 一心だ

波は七折れ 八返し

鰯ははずすな なんのその

ヤレ漕げ ギッコン

命の瀬戸よう 播磨灘

鐵児よ 嬢アよ 阿母よ

板子一枚が財産だ

貧乏世帯が なんのその

ヤレ漕げ ギッコン

命の瀬戸よう 播磨灘

由良へ 紀淡へ 友島へ

先手打とうぞ 負けまいぞ

布着網だ なんのその

ヤレ漕げ ギッコン

命の瀬戸よう 播磨灘

南無亀山の御坊主

阿弥陀雲だで 暴風アにげた

登龍鉢巻 なんのその

ヤレ漕げ ギッコン

命の瀬戸よう 播磨灘

お夏清十郎音頭

城は姫山 ヨイヨイ 白鷺やぐら

船場の水に

とろりこうつした

優さすがた

お夏狂えは

うす紅色の花が散る

アノソレソレ 花の清十郎じゃ 清十郎じゃ

囃し(チラホラ花の 散る花の

花の性なら チラホラチラトチラホラ
ト)

2

恋の浮橋 ヨイヨイ 総社へかけて

お夏来て泣く

姫路街道の

夫婦松

3

泣いて血を吐く

八日月夜のホトトギス

アノソレソレ 月の清十郎じゃ 清十郎じゃ

囃し(チラホラ月の照る月の

月の性なら チラホラチラトチラホラ
ト)

4

いま鳴る鐘は

野里心光寺の供養の鐘

アノソレソレ 鐘の清十郎じゃ 清十郎じゃ

噓し(チラホラ鐘の 鳴る鐘の

鐘の性なら チラホラチラトチラホラ
ト)

〔昭和六年、現代文芸〕

秋蚕

五枚掃いても 損をした

七枚掃いても 損をした

繭は山ほどとれたのに

もうけは春の半分だあ

だんだん下りに 繭アさがる

なんぼなんでも 繭アさがる

みんな資本家が 搾るんだ

俺いらつくづく 考えた

背戸の畑の 桑ぬいた

納屋のまわりに 桑すてた

そのの そのの

枯れた桑焚いて 俺アむせた

〔昭和六年、民謡同志〕

憂曇華

鶏小屋に うどんげの

花が咲いたが どうしよう

地主ア胴慾 納米のかたに

鶏みんな 取上げた

サビた農具に うどんげの

花が咲いたが どうしよう

猫の手もいる 麦秋時を

立穂収穫禁められた

冷えたかまどに うどんげの

花が咲いたが どうしよう

地主ア胴慾 無理からとおす

それでよいのか 庚申様よ

〔昭和六年、民謡同志〕

魚町正月情緒

鳴田盤 つま下駄 抜襟紋

恋の魚町梅の香に

明けりや素足の アララン アララン

姫路芸者の ララ 心意気

垂帯 木履 口の紅

舞妓の江くぼの可愛いこと

誰と逢うやら アララン アララン

総社、十二所 ララ 初詣うで

お注連 門松 盛塩

恋の追羽根なせにげる

そつとひらいた アララン アララン

れんじ小窓のララ縁むすび

〔昭和六年、黎明〕

闇夜二章

しんのしんから

闇夜は暗い――

泣き声 すれど

姿は見えぬ おいのう

顔さえみえぬ そよのう

賢い奴は 先きゆく どんと

どんのどんつく 辻で迷う

中禪寺小唄

まっくろくろぐろ
さいな まっくろくろぐろ
昼が夜やら 夜が昼やら ちらちらちらり

しんのしんから
関夜は恐わい――

夫婦になつても
乏しめてならぬ おいのう
寒うてならぬ そよのう

手さぐり 手くらがり 転手古舞 どんど
俺さの灯 誰が消した

鬼がでるやら
さいな 蛇がでるやら

冬か関夜か 関夜か冬か ちらちらちらり
〔昭和六年、牧笛・今日の民謡〕

滝は華厳か
あの霧降りか

恋の滝壺 テモ 花しぶき

飛沫ア ねね
ぱっぱぱつと咲いて ぱつと散る
末はながれて 湖となる

テモ サツテモ 中禪寺 中禪寺

上野嶋から

男体山へ

懸けた恋の橋 テモ 虹の橋

虹ア ねね

ほんのり浮き浮き 浮き情け

日光さまへ 願かけた

テモ サツテモ 幸の湖 幸の湖

恋のキヤムプで

湯本をめぐりや

白樺林 テモ 花畑

花ア ねね

可愛いあ娘の 肌の色

戦場ヶ原の 紅霞

テモ サツテモ 湯の湖 湯の湖

―日光の人々に贈る―

〔昭和六年、新興詩学〕

百姓の唄（断章）

蕃粥に サイナ 蕃粥に
翼をつけたりや 赤トンボよ
肌が寒いちめて すうーい すうーい

金にもならず 飛んで逃げた

蚕豆に サイナ 蚕豆に

手足つけたりや 雨蛙よ

雨が降るちめて びよんこ びよんこ

糧にもならず 跳んで逃げた

赤トンボでも サイナ 赤トンボでも

翼がありやこそ 飛べもする

雨蛙でもサ サイナ 雨蛙でも

手足がありやこそ 跳ねもする

地主でも サイナ 地主でも

土地がありやこそ 旦那衆よ

旦那衆から その旦那衆から

田地とったりや ただのひとよ

旦那衆に サイナ 旦那衆に

角をつけたりや 赤鬼よ

米が収穫たちめて すたこら すたこら

夜昼かけて、せめてくる

×

小作でも サイナ 小作でも
団結に燃えたら 地雷火よ

立禁刈禁 尻でもない

ままよボカんと 爆ぜつちやえ

×

瘦地でも サイナ 瘦地でも

田地や 俺いらの城塞よ

槍が降ろうが 火が降ろが

挺子つっぱつても 動くなよ

〔昭和六年、楽園〕

蟹工船

藪の値はさがるし 米アやすし
どげでも百姓ジァ 食えねえと

ええ さあーて

青森港の雪どけを
酔っぱらいちゃんが行ったげな

カムチャッカ風か 大漁か

酔っぱらいちゃんは丈夫で 稼いでか

ええ さあーて

せめて鵜のたよりなど

今日も待ち待ち日が暮れた

噂の噂は ほんとうか

エトロフ丸は 地獄船

ええ さあーて

鞭でうたれて 犬のよに

不眠不休で 食うや食わず

楽に正月 越したいと

酔っぱらいちゃんが行ったげな

ええ さあーて

青森港の青い灯に

泣いて別れた連絡船よ

〔昭和六年、黎明〕

生臭坊主

生臭坊主

ナムマイダ

なにがお経だ 説教だ

ながいものには

まかれよと

なにが辛棒だ あきらめだ

ふみにじられた

しぼられた

なにが後生だ 因縁だ

地獄 極楽

釈迦 坊主

碁でもうってろ
ナムマイダ

木魚の割でも気にしてろ。

〔昭和六年、檀林〕

みなカラクリだ ごまかしだ

碁でもうってろ

ナムマイダ

謎かけ

男へ嫁いという謎

解けたか 嫁ぬか

女へ箆筒 長持

鏡台はおろか

ほんの着がえも

ないわたし

しよせん 謎かけ

とけぬ とけぬ とけぬ

男へ秋の夜長を
解けぬか まだか

女へ淡路一带

不作に不作

今日食う糧に

ことかいて

とても謎かけ

とけぬ とけぬ とけぬ

男へお月ア沈むし

謎アまだ とけぬか

女へ立毛刈りにヤ

捨身のかくご

村の皆ん衆の

てまえでも

浮いた謎かけ

とけぬ とけぬ とけぬ

男へしんそこ 惚れたに
どうでも とけぬか

女へテロで 爆発つて

ろうやへいった

父さの 安否が

しのばれて

悲し謎かけ

とけぬ とけぬ とけぬ

〈昭和六年、牧笛・今日の民謡〉

恋文

—加古川のある未亡人の唄える—

雨ふる雨ふる春なれば

柳の葉っぱに チャラチャラチャラ

若い蛙が跳ねてそろ

柳や苦いワ 酔っぱいワ

夕べとなれば チャラチャラチャラ
年増の恋が泣けてそろ

ライト・グリーンの雨ゴート

蛇の目かして チャラチャラチャラ

逢いに来てそろ 今日もまた

去年ハズをなくしてよ

まだくちびるは チャラチャラチャラ

松葉牡丹の花にそろ

〈昭和六年、牧笛〉

赤トンボと雨がえる

とうがらしに

はねをつけたりや

あかとんぼよ

あかとんぼでも

はねがありやこそ

とべもする

そらがあおいちゆて

はだがさむいちゆて

よめにもならずにとんでにげた

×

そらまめに

てあしついたりや

あまがえるよ

あまがえるでも

てあしとつたりや

ただのまめよ

〈昭和六年、拳〉

草刈唄

朝たつ虹か シヨイシヨイ 秋草刈れば
うすべにいろの ヨ

野菊がまじる
シヨイシヨイ コラ シヨイシヨイ

野菊いとしや シヨイシヨイ しつぽり濡れ
て

化粧くずれの ヨ

泪か 露か
シヨイシヨイ コラ シヨイシヨイ

空は青空 シヨイシヨイ お馬よままよ

野菊可愛めて ヨ
刈りようものか

シヨイシヨイ コラ シヨイシヨイ
野菊のこして シヨイシヨイ 秋草刈れば

利録うれしや ヨ

しよいしよいはずむ
シヨイシヨイ コラ シヨイシヨイ
〔昭和六年、今日の民謡〕

筑波の唄

やくざどうしで わた夜の夢は
鷺の住むという 筑波山

あ、あー夢なら夢で

さめずとおくれ
赤い夕陽の 沈む山
(やんちゃしよう)

やくざどうしの 分厚い情け
よるべない身の 夢と夢

あ、あー筑波追われて

はやひとむかし
どうセルンペン旅鴉
(やんちゃしよう)

やくざどうしに 生まれた冥利
だいてだかれて 夢うつつ

あ、あーせめて筑波の

唄など唄え
ここらあたりの陽の薄さ
(やんちゃしよう)

やくざどうしは 腐れた縁
夢は筑波の 峯巖

あ、あー筑波よ 筑波よ

俺らばちあたり
故郷ばかりは 悲しやの
(やんちゃしよう)

〔昭和七年、角笛〕

ひとこと問いたい

河原 枯声
さらさら 雲

秋になつても
よ、なぜこない
冬がきたのに
さ、まだこない

思いきる気は
さらさら 雲

いつも 秋きて
よ、春かえる
毒消し売りの

ね、むすめ、よ

消えてゆくなら
さらさら 寒

おととい 飛んだ

よ、かりがねに

ひとこと 聞きたい

え、ことがある

つぐみ鳥

ここは何処だやら寒い風

見知らぬ国の森の陰

ねぐらはぐれて日はくれて

俺らしよんぼりと つぐみ鳥

マドロスさんと サノ

逢う夜さは

夜さはしみじみ ヤンサノ

夜さはしみじみ すぐ明ける

明けりやしよんがい サノ

せんもない

名残りが浦に ヤンサノサ

名残りが浦に 雨が降る

御崎 御崎に サノ

ふる雨は

沖出雨なら ヤンサノサ

沖出雨なら 土砂ん降り

土砂降りつづきで サノ

今日も暮れた

若いマドロスさんにや ヤンサノサ

若いマドロスさんにや いつ逢える

霜に凍えてねた夢に
母が泣き泣き逢いに来た

ねぐら忘れてあてもなや
俺ら親不幸つぐみ鳥

〔昭和七年、山陰詩脈〕

赤穂御崎情歌

赤穂御崎に サノ

よす波は

波はさらさら ヤンサノサ

波はさらさら すぐきえる

うすい情痴の サノ

涙月

泣くや淡路の ヤンサノサ

泣くや淡路の 浜千鳥

雨の新瀬 サノ

あと二日

十日も逢えなきや ヤンサノサ

十日も逢えなきやどなにしよう

雨はふるふる サノ

から船に

御崎十八の ヤンサノサ

御崎十八の 泣き黒子

附記

・名残りの松は、大石内蔵之助が
赤穂出発の時、別れを惜んだと
いう有名な老樹。

・から船は、昔支那の海賊船が、
宝物を埋めたという伝説の所。

〔昭和六年、南国の唄〕

朝焼け

馬よ 嘶け 朝焼けだ

瘦田 日蔭田

小作田 ナンノ

故郷は 赤穂の 義士魂

一代男の 力瘤

どんとずしんと 力瘤

芽ぶけ 山杉 すぐ春だ

意気だ 意気地だ

一心 ナンノ

親は 三代 水百姓

子は一代の 度胸鐵

どんとずしんと 度胸鐵

朝は朝星 夜は夜星

命 息鐵

振れく ナンノ

一番 努力の 盛りかえし

血汗流して 土肥やせ

どんと ずしんと 土肥やせ

ほたる

加古川の キッスイ

蛍は スイ

ちよいと こがれて

死ぬほど こがれて

チチラチラチラチラチラ

夏は キッスイ

短夜 スイ

ひとめで いって

死んでも いって

チチラチラチラチラチラ

〈昭和七年、牧笛・静座〉

—大石進一作曲—

雪がふる

汚い

この世に

雪がふる

ほんに

この世は

かあさんよ

あいつも

こいつも

出世した

しんみり

〈昭和七年、鳥根詩人〉

母さまよ

母さまよ ああ 母さまよ

私の顔みて なに泣きやる

繕う手やすめて しげしげと

嫁入りの ええ 嫁入りの

朝夕 離れて 住んだとて

生みの親娘は いつまでも

広峯の のう 広峯の

のぼりくだりは 十八九町

そして 姫路へ ほろ一里

奥谷の あのと 奥谷の

穹が晴れたりや 姫路も晴れる
ところ人情に 変わりない

ずいぶんと ほに ずいぶんと

加減しなされ よる年ゆえに
秋は手伝に 帰ります

母さまよ ねえ 母さまよ

うれし暗着に 汚みつきまする
泣いておくれるな 母さまよ。

(昭和七年、白い雲)

春宵夢

—京都祇園にて—

膝枕

酔えば 夢みる

五臓の疲れ

—乳呑子かかえて

迎びに来た

はるばると

夢か 現か

花咲く京へ

—不実ものよと

泣いて来た

津の国の

名酒『白鶴』

不覚の酔か

夢に祇園へ

妻が来た

金燭の

襖の陰に

両手をついて

ころころ 笑う

とんとんとん

とんとんとん

とんとんとん ころり

とんとんとん ころり

とんとんとん

とんとんとんとん

畑うちや 暗れる

増位の山の

朝霧 暗れる

あん娘 笑顔で

心も暗れる

とんとんとん

とんとんとん

とんとん ころり

とんとん ころり

とんとんとん

去う
帰ろうの
あの声が……

旅の夢

醒めりや、やつぱり

五臓の疲れ

寝汗かかせて

消えてゆく

(年月不明、未発表)

畑うち唄 (小景)

とんとんとんとん

畑うちや 笑う

豆の葉ごしに

あん娘が 笑う

とても 芋のよに

〈昭和七年、白い雲〉

河豚

去年の 秋の

今夜の雨に

親父ア ぼっくり

河豚食うて 死んだ

河豚としりつつ

食うた奴が 阿呆よ

阿母は 仏に

愚痴愚痴 泣いた

加古の河原の

日暮の雨よ

かいかいつぶりが

今年もきてる

孫子の 代まで

河豚だけは 食うな

親父が 死んでから

みんなく 痩せた

〈昭和七年、新日本民謡〉

すぐ春だ

粥が煮えたりあ

粥なとす、れ

妻よ

泣くなよ

暖い霜だ

薄い粥でも

こころの熱さ

芽ぶく 南天

光る雲

雀あ 南天の

枝から枝へ

妻よ

泣くなよ

すぐ春だ

〈昭和七年、火虹〉

眼を病めば

眼を病めば 眼を病めば

暗い心に 雪が降る

諦められぬ 諦められぬ

ひたひたひたと 雪が降る

眼を病めば 眼を病めば

暗い心に 火が燃える

なぜに忘らりよ なぜに忘らりよ

ろんろんろんと 火が燃える

眼を病めば 眼を病めば

暗い心に 霧が刺す

眼を病めば 眼を病めば

暗い心に 夜が更ける

いっそころそか いっそころそか

しんしんしんと 夜が更ける

〈昭和七年、詩話塔〉

薄虹

薄い虹見りや

薄うて泣ける
薄い虹のよな
くらしの寒さ

薄い虹なら
薄うてもよいが
薄い虹だと
泣き顔するな

薄い虹ゆえ
薄うも見えた
薄い虹でも
お太陽さんにア燃える

〔昭和七年、港街文芸新聞〕

死のか殺そか

せめてきて啼け

ちゅんから雀
待てば藪蔭
雪が降る

わってみしようか
青竹なりと
ボキンボキンと
鳴るがいな

死のか殺そか
雪のような人を
想いとどかぬ
日は暮れる

〔昭和七年、愛誦〕

冬霽

吹くというなら

吹かれもしようが
この世一木枯一風つぶて

折ろと いうなら
折られもしようよ
折れて すませる 泪なら

俺も 裸木
恥ア かき捨てだ
どうせ
野晒し一生晒し

裸だ——素ッ裸だ
すっぱんぽんと
捨てりや
心も
ぽんと霽れる

〔昭和八年、日本詩壇〕

三原（古調）

思い出したりや 睨をとじろ
伊豆の大島 三原の山の
逢いに来たよな、アレサ
緋鹿子絞りの 火が見える
睨とじたりや 睨のうらで
なじよに忘らりよ 御神火様の
泣いて来たよな、アレサ
振袖姿の 火が見える

明石千鳥（古調）

松は霧吹く 月ア虹かむる
明石千鳥が啼いた、とせ

サンサ サラリコ

サンサラリ

鳴戸越やるか 浪切千鳥
夢も紫紺に濡れた、とせ

タンタ タラリコ

タンタラリ

通う千鳥も 淡路に暮れて
寒や明石の もどり潮

チンチ チロリコ

チンチロリ

月の雫か ちろむち千鳥
かえすうなじに冷り、とせ

〔昭和八年、龍巖〕

角力音頭

男はたちの よいしょ 春場所で
恋も亡に 搦めて組めば
一枚肋骨の ソレ 度胸骨

一番 命の

はっけよいやさの 度胸骨

見事押切る よいしょ 土俵際
勝って囁く 天下の秋の
四本柱に ソレ 昇る月

天晴れ 仰いだ

はっけよいやさの 昇る月

どんと頭突で よいしょ ぶっ飛んで
負けて口惜しけりや 土俵砂唾じれ
砂に埋れて ソレ 蛆となれ

天下 秦平

はっけよいやさの 蛆となれ

化粧まわしは よいしょ 鯉のぼり

櫓太鼓も 天まで響く

男 横綱 ソレ 土俵入

一代 出世の

はっけよいやさの 土俵入

〔昭和八年、詩瀧〕

物語

（若い船長さん 今晚は！）

南の鳴の 貝のよな

きれいな お土産

ちようだいな

（若い船長さん なに見てる？）

南の鳴の 星のよな

さみしい お話し

しておくれ

（若い船長さん なぜ泣くの？）

神戸ミナトの 春の雨

パイヤ色した

濡れかもめ

（若い船長さん 明日出帆の？）

南の鳴の 花のよな

可愛い 娘さんが

待っている

風

風は

目もない

耳もない

あいつ 一本杉

引炸ごぞ

この世
情も義理もない
癩な癩っ面
へし折ろぞ

きれいな花なら
なぜ咲いた
花も咲かねば
散らされまい

ぬうたりぬうたりぬっべらぼう
風は
目もない
耳もない

〈昭和八年、龍膽〉

ふかむ秋

さめて
さみしい 夢の
朝

(豆腐屋さん！)
裏木戸越しに
呼びとめて

(弟さんの
ご病気は？
いいえネ
お豆腐を
頂戴な)

思い迷わす
時雨ぐせ
おや
うっかりと
ふかむ秋

〈昭和九年、島根詩人〉

スタコラ節

おぼろ月夜に
胸は高鳴る
浪の音 スタコラ
浮れ浮れて
蛸が海辺を
散歩する
ハ、エライコッチャ
エライコッチャ

白い砂丘
海藻しげる
磯の蔭 スタコラ
赤い鉢巻
蛸が砂ほる

貝さがす

ハ、エライコッチャ
エライコッチャ

貝は蛤

うれしはずかし
まるはだか スタコラ

蛸はよろこぶ
貝もよろこぶ
月ア沈む
ハ、ナンノコッチャ
ナンノコッチャ
(昭和九年、歌謡タイムス)

須磨の月(組曲)

—新日本音楽のために—

(昇月) —

須磨の落雁 淡路に暮れて
月も渚に 浮いた トセ

(風 嘯) —

松は霧噴く 磯は虹かむる
月もうなじに 冷り トセ

(千鳥) —

鳴戸越やるか 浪切り千鳥
月も紫紺に 濡れた トセ

(鼓 笛) —

浪の小鼓 青葉の笛に
月もひとさし 舞うた トセ

(鶴 越) —

越すに越されぬ 鶴越えて
月も素足で 忍ぶ トセ

(沈 鐘) —

ゆかし須磨寺 鐘の音寂びて
月も稚児衆に 通よた トセ

(昭和九年、歌謡タイムス)

訣郷の唄

向日葵は

お天道さま拝め拝めというた。

お天道さま拝んでりや

俺目にしてみた。

頼みましたぞ おさらばさらば。

黄金虫は

おかしそに草をかむった。

それほど 男泣きがおかしいか

それでよいのか、おさらばさらば。

軒のつばめよ

鶏頭の花よ。

連れてゆけとか

よう、帰れとか

隣の妹よ、おさらば、さらば。

さらば おさらば

おさらば さらば、

泥田の 泥鯰まで 泥かけた

今日で故郷も、おさらばさらば。

(昭和九年、龍膽)

鶯 (即興小唄)

増位風はまだ寒い
梅の初花あげましょか

ちやらんぼらんと口説く手に
のせられまいぞ おぼこの娘。

×
初手に惚れたも ホーホケキョ
手出したのも ホーホケキョ
ちやらんぼらんとよくしゃべる
茶稚な鶯じゃないかいな

あらしの海

どんどんど 海が鳴る夜さは、
浪にのまれた 息子の、のう
いのちが生きて 帰るよだ。

網元ア たったの 網と舟。
俺らにア かけがえない 息子。
金でいのちが買えるかよ。

赤児の腕でも ねじるよな、
網元づらが 憎らしい。
口惜し泪が 流れるぞ。

暴風かぜの海で おーい おーい
息子の声が 呼ぶようだ。
おおさ、呼ぶようで、呼ぶようで 眠られぬ。

どんどの海よ、網元よ。
浪にのまれた 子をかえせ。
可愛い 可愛い 子をかえせ。

〔昭和九年、新日本民謡〕

翔たばせておいて

渡り鳥だぞ
千里の海を
翔たんで帰らぬ

海つばめ

伊豆の大鳴
三原の山の
御神火 仰いで
椿の葉巻
すっぱすっぱと 喫たったやつ

飛ばせておいて、よう
飛ばせておいて、よう
なじよ泣いた

〔昭和九年、新日本民謡〕

裸木

故郷ふるさとなら 両親おやなら 捨てたぞい
夢なら 恋なら 消えたぞい

野すえ 行くすえ 冬の風
ぼんと裸木 一本気

しんのしんまで 冷えたとして
末の末まで 枯れたとして

こいつ小癪こぼな 木枯め
男吹くなら びユんと吹け

〔昭和九年新日本民謡年鑑第二集〕

米のなる木

へわたしや備前の岡山育ち

米のなる木はまだ知らぬ

この有名なる古謡の、ジャズ狂乱の巷に
埋没され、惜しむ声なき現今、その伝説、
（三歳の女兒が、母の乳首を噛み切り死亡
させたという罪で牢屋で育った娘の、米を

搗うきながら唄うったその不憫さが藩主の耳に
入り、遂に牢屋から赦されたと云う）より
採りて補作再生せしむ。

ナアー 備前岡山 日の照るところ
なぜにわたしはナアー日蔭者

今日も泣き泣き 米を搗うく サイナア

へわたしや備前の岡山育ち

米のなる木はまだ知らぬ

ナアー 情けないぞえ 三つのときに
悲しや乳首をナアー 噛み切つて
母を死なせた 罪ゆえに サイナア

へわたしや備前の岡山育ち

米のなる木はまだ知らぬ

ナアー 夢か現か鳥城とりしろの天主
黄金こがねの墓はかにナアー 白金しろがねの鶴

藩主はんしゅが御仁ごにんの日が昇る サイナアー

へわたしや備前の岡山育ち

あとを慕うじあ　ないけれど
未練のこすじあ　ないけれど

月のない夜を　あかあかと
わたしあ　どこまで　燃えてゆく

（昭和九年、新日本民謡）

五月の空より

—家売ろ—

夢も

桜も

見んごと　散った。

男！

青葉の吹き流し。

五月の空より

気味よい

貧乏だ。

光って　泳ぐ
鯉のぼり。

家は売っても
陽は頭上にある。

仰ぎや

さんさん

目にしみる。

いやさ

男が

見んごと　散った。

なんで　男が

泣くものぞ。

（昭和九年、新日本民謡）

暴風

風も　吹きよで　暴風となる

まして恋すりや　気も狂う

ままよ　吹け吹け　暴風となれ

おおサ　逃げてゆこう

おお　おお　逢いにゆこう。

暴風なら　目もない　耳もない

恋なら　世間も　義理もない

愛し　恋しの　つる身が

おおサ　逃げてゆこう

おお　おお　逢いにゆこう

思い増位の　峯越えて

とめてとまらぬ　雲ゆきだ

矢も　楯もない　恋の捕虜

おおサ　逃げてゆこう

おお　おお　逢いにゆこう

蹴る

石を

蹴ったりや

カンカラカんと

笑うた

笑ろたばかりか

ころんで

逃げた

どんの

どんすりや

どんすりや

ええ

石まで

笑うた

石まで逃げた

（昭和十年、新日本民謡）

佗住い

男 三十路の
佗住い
世話妻もない
独り身が

しんそこ 気楽に
夕焼の
雲をながめて
行水の
御前に候
とばかり
養蛙

義理も 人情も
故郷も
どこ吹く風と

すねものが

しんそこ 涼しい
夕顔の
壇よりいでし
光秀か
さりとは
そこな
養蛙

勝つも 負けるも
時節なら
男 ずばりと
諦めて

しんそこ 静かに
夏の夜を
語りあかそよ
わしが友
のう
養蛙
養蛙

わしは世のすみ

人のすみ

おぬしは木のかげ

石のかげ

しんそこ 冷たい

北斗星

仰ぐ瞳に

しんしんと

澄んだ

おぬしの

面がまえ

〈昭和十年、新日本民謡〉

母看り

死にちかい
母を看りの

枕への葵の花が
瞳にしみる。

母と呼び 子と呼ぶ
絆絶えだえに
今日も暮れるか
あかね雲

ほのぼのと機節唄うて
眠かされた
思い出ゆえに
この俺が

泣くまいと
すればするほど
蚊やり火に噎せて
涙の咳をする

風邪ごこち

病臥びやうがの
淡い 脈膊みやくの
いとしさに
じつと きいてる
遠しぐれ

ブラチナの
腕巻時計に
更ける秋
今宵 微熱の
ほのけきよ

隣家に
引越してきた
大学生
スポーツマンらしい、
そのタイプ

ほのぼのと
軽い 頭痛に
おもいやる
三十路さんじゆおんなの
風邪かぜごころ

〔昭和十年、新日本民謡〕

笛

他国のひとと 笛の音は
青い月夜に 逃げてゆく

逃げてゆくなら ゆかしやんせ
わたしや浜辺に ええ 泣くばかり

吹けば悲しや 芦笛は
思い出させて 消えてゆく

消えてゆくなら ゆかしやんせ
わたしやひとりで ええ 死ぬばかり

〔昭和十年、新日本民謡〕

蟬

松の
梢に
さんらんと

金の
御光が
ふりそそぐ
金仏さんなら
ありがたや ありがたや

いのちの

秋の
夕ぐれを

蟬が お経を
あげている あげている。

〔昭和十年、未発表〕

納涼満月おどり

月はまるくて サッコラサ
まんまるくて まるいヨー
国もおさまる サッコラサノサ
ソレ 黄金もたまる 嫁もくる
へサッサ あっちゃ向け こっちゃ向け
満月おどりで サッコラサノサッサ

月は名月 サッコラサ
自慢じゃ ないがヨー

軽く品よく サッコラサノサ

ソレ 手ぶり 足ぶり 男ぶり

へ(以下囃し同じ)

月の出潮を サッコラサ

浴衣に 染めてヨ

着せてやりたや サッコラサノサ

ソレ 満月おどりを おどる娘に

へ囃し

日本の秋の サッコラサ

満月みればヨ

想い出します サッコラサノサ

ソレ 主は満洲の 人柱

へ囃し

闇夜ばかりじゃ サッコラサ

恋路も 暗いヨ

年に一度の サッコラサノサ

ソレ 暗れて逢う夜の お月さま

へ囃し

名月さまなら サッコラサ

まだ年ア 若いヨ

願いかけましょ サッコラサノサ

ソレ わしもともども 若いよに

へ囃し

あなた清十郎で サッコラサ

わたしは お夏ヨ

笠がよう似た サッコラサノサ

ソレ 満月おどりの 菅の笠

へ囃し

舞さもらおか サッコラサ

お嫁に ゆこかヨ

月がもの言うた サッコラサノサ

ソレ いっそこの秋 月見頃

(昭和十一年、発表誌不明)

煙

煙ア

浮気かヨ

俺よなぶる気か

ヨン 帯をといたり

むすんだり

×

煙ア

あの娘かヨ

俺よじらす気か

ヨン 傘をさしたり

すぼめたり

×

煙ア

月夜のヨ

白帆か 鷗か

ヨン 恋の瀬戸海

ゆらゆらと

煙ア

ひとすじヨ

俺やうわの空

ヨン 恋慕明石の

浦こえて

(昭和十一年、詩人文化)

兵庫音頭

神戸港は 扇の港ヨ

聞く日本の 表門

背山六甲 朝汐いろに キタシヨ

えがく版画の 宝船

まねく世界の エーマタ宝船

囃しへ兵庫 ひょうばん 音頭で ホイ

調子そろえて 来たせの ホイホイ

ロブウエイで 浮かれて浮いてヨ
せめて四五日 須磨の浦
さくら牧盛 なぜ散りいそぐ キタシヨ
笛も青葉に なるものを
昔の夢に エーマタ なるものを

お花畑を 鈴の音ぬうてヨ
淡路巡礼 うららかに
浄るり一口 人形の手ぶり キタシヨ
演れぬおかたは 他国の者
情けしらずの エーマタ他国のもん

恋の双六 歌劇で逢うてヨ
うれし湯上がり 宝塚
灘の生酒に ほんのり酔えば キタシヨ
胸の伊丹も 上の空
飛んで行きたい エーマタ上の空

舞子かわいや 表の瀬戸で キタシヨ
踊りや裏から 音頭とる
日本海から エーマタ音頭とる

加古川は末広 流れに映えてヨ
松のみどりも 高砂や
この浦舟に あの娘をのせて キタシヨ
嫁にやり鯛 明石鯛
ほんにめで鯛 エーマタ明石鯛

みすやの針の 浜坂までもヨ
延びてとどくよ 損保の糸
竜野うす口 うすむらさきに キタシヨ
染めて祭りの 着物縫うた
姉も妹も エーマタ着物縫うた

燃ゆ おもいは 鉄でも溶かすヨ
男、広畑 燗鉢炉
船は川崎、相生うまれ キタシヨ
今朝もドックに 鳩がとぶ

月にむかしを たずねてみればヨ
温泉、有馬の 千年家
鳴戸なつかし おのころゆかし キタシヨ
神代ながらの 渦が巻く
国を聳の エーマタ渦が巻く

尼ヶ崎なら 煙突景気ヨ
東風はけむかる 西宮
戎さんなら うれしじやないか キタシヨ
芦屋を向いて にこにこ
なんのけむかる エーマタにこにこ

赤穂御崎に どんと打つ波はヨ
四十七士の 陣太鼓、
城が見えます 国宝の城が キタシヨ
花の姫路の まんなかに
播磨平野の エーマタまんなかに

海は広重 絵のよな家島ヨ
波にこがねの 月がでる

晴れて平和の エーマタ鳩がとぶ

生野、明延、銅でもござれヨ
あちら須賀山 金と銀
三木の金物 西脇織で キタシヨ
小野のソロバン またはずむ
千両万両で エーマタはずむ

兵庫音頭にや デカンシヨがまじるヨ
盆地篠山 盆おどり
月のテレビに 山家の猿の キタシヨ
芝居うつして おどりたや
都舞台に エーマタおどりたや

雪がつもれば なさけもふかむヨ
スキーなりやこそ 神鍋へ
お湯が熱けりや おもいも燃える キタシヨ
湯村、城崎、夢うつつ
但馬よいとこ エーマタ夢うつつ

牛を見よとて 但馬へ来たがヨ
牛を忘れて 鶴みてる

鶴は巢ごもる 豊岡あたり キタシヨ
崩える柳を どうなさる

こおり編む娘を エーマタどうなさる

蟹のかずほど 便りを貰てヨ
ゆけば香住の 島めぐり

紅葉ほればれ よろいの袖に キタシヨ
一枝かざした 殿御ぶり

忘れられない エーマタ殿御ぶり

日和山から のぞいて見ればヨ
海女の息笛 せつなかる

人魚追おうか 龍宮も見よか キタシヨ
グラスボートの おもしろさ

洞門めぐりの エーマタおもしろさ

子守唄

ねんねんねん

そら豆 青豆ア 蛙やぞい
マツチの手足で 蛙やぞい

ねんねんころころ 芋の露
のんだらころろんで ねんねしな

ねんねしな

ねんねんねん 豆かいな
蛙アやっぱり 豆かいな

手足が抜けて 豆かいな
ねんねんころころ 池の端

いそいでころろんで けがするな
けがするな

ねんねんねん

豆なら達者で ええやないか
蛙は帰るで ええやないか

ねんねんころころ 華の都会

見たけりやころろんで 目々しめな
目しめな

(昭和二十九年詩と民謡)

走れ、白帆

1
青い波、赤い旗 走れ、白帆
恋のクロール 跳ぶよ飛沫
サーッと 飛魚の、とぶように……

2
光る夏、語る恋 燃ゆる思慕
いとし接吻 濡れる口唇
赤いヨットの 濡れるように……

3
金の月 銀の波 夏はたのし
君と踊ろよ スクラム組んで
男波、女波の 躍るように……

〔昭和六年、タイヘイレコード〕

夢の磯辺

1
花と貝、君とぼく 夢の磯辺
みどりの風に 匂うまぼろしノ
夕月草の 匂うように……

2
恋し君、やさし君 夢のイニシャル
波に消えた 恋の想い出ノ
出船の笛の 消えるように……

3
星と月 君と行く プロムナード
今宵、別れに 震うこの胸
波止場の星の ふるうように……

〔昭和六年、タイヘイレコード〕

姫津双六

へ 咲いた桜に 天守が浮かぶ
あれは国宝 お国自慢の白鷺城

へ 播保の河原に 身を焼く虫
夏は短夜 噂龍野へ通い来る

へ 栗栖三日月 徳久に佐用
土居の四ッ塚 眠る維新の人柱

へ わたしや湯の郷 温泉むすめ
恋の紅帯 あつい情の湯でとける

へ 天勾踐を 空しゅうするなかれ
忍ぶ院の庄 忠臣児島の名が残る。

〔タイヘイ・長津彌作編曲〕

播磨音頭

ハ― 播磨ナ
春の姫路で見せたいものは サテ
咲いた桜に お国自慢の白鷺城

ヤンレ ソレソレ 白鷺城
アリヤサノ コリヤサノ ヨーイトナ

ハ― 播磨ナ
霞む淡路に虹立つ頃は サテ
播磨灘衆の 鯛釣り船にときの声

ヤンレ ソレソレ ときの声
アリヤサノ コリヤサノ ヨーイトナ

ハ― 播磨ナ
赤穂岬にどんと打つ波を サテ
聞けば血が湧く

四十七士の陣太鼓

ヤンレ ソレソレ 陣太鼓
アリヤサノ コリヤサノ ヨーイトナ

ハ― 播磨ナ

ほがら日和に松蔭涼し サテ
恋の高砂

播磨瀬戸海ゆらゆらと

ヤンレ ソレソレ ゆらゆらと
アリヤサノ コリヤサノ ヨーイトナ

ハ― 播磨ナ

雪の室津もしんみり更けて サテ
昔語りに

君が泣くやら千鳥やら
ヤンレ ソレソレ 千鳥やら

アリヤサノ コリヤサノ ヨーイトナ

ハ― 播磨ナ

播州平野はよい米どころ サテ

君の御稜威に

千両万両の倉が建つ
ヤンレ ソレソレ 倉が建つ
アリヤサノ コリヤサノ ヨーイトナ

ハ― 播磨ナ

揖保の川原に身を焼く蜚 サテ
なぜにとどかぬ

龍野娘の恋どころ
ヤンレ ソレソレ 恋どころ

アリヤサノ コリヤサノ ヨーイトナ
(タイハイ文芸部作曲)

お城祭りの唄

城になりたや 白鷺の城に

お城まつりのあの城に
エーソウトモ ソウトモ

播州姫路は 城のまち

昇る朝日は あの駢隊旗

お城まつりの城照らす
エーソウトモ ソウトモ

播州姫路は 城のまち

姫路姫山 桜の裳すそ

お城まつりの花嫁御
エーソウトモ ソウトモ

播州姫路は 城のまち

東、姫山 西、男山

お城まつりの首頭とる
エーソウトモ ソウトモ

播州姫路は 城のまち

君は満洲 露宮の夢は

お城まつりの夢じゃやら
エーソウトモ ソウトモ

播州姫路は 城のまち

播磨灘から 姫路を見れば

お城まつりの娘が招く
エーソウトモ ソウトモ

播州姫路は 城のまち

空は姫路の 紅むらさきに

お城まつりの灯がつづく
エーソウトモ ソウトモ

播州姫路は 城のまち

(タイハイ佐藤たかし作曲)

お菊数え唄

一枚かぞえて 一トしづく
二枚かぞえて 二タしづく
皿にうらみの かずかずを

かぞえてお菊は よう
ほんに 口惜しかる 口惜しかる

へさつさ祭ろよ 賑やかに
お菊祭りをヨイヨイ 賑やかに

三枚目には国のため
四枚目には夫のため

皿に祈りの かずかずを
ささげて お菊は よう
ほんに 切なかる 切なかる
へ(囃し以下同じ)

五枚強情と 責められて
六枚牢屋の 起き臥しに
皿に苦勞の かずかずを
尽してお菊は よう
ほんに 悲しかる 悲しかる
へ(囃し)

七枚八枚 春の夜の

いずこの空か 鞠負さま

皿に情けの かずかずを

夢みてお菊はよう

ほんに逢いたかる 逢いたかる

へ(囃し)

菅笠しぐれ

娘ごころの ひとすじ時雨
泣いて行くのは

お夏じゃアないか

あかい鹿の子の

あかい鹿の子の

アレサ 振袖で

(合唱) お夏狂えば

あっちゃあ向いても

こっちゃあ向いても

清十郎

清十郎

笠がよう似た 菅笠が

忍び逢う夜の 菅笠時雨

笠が深うて

お顔が見えぬ

清十郎恋しや

清十郎恋しや

アレサ 笠憎や

(合唱以下同じ)

恋はお夏の 狂乱しぐれ

夢にうつつに

清十郎の笠に

濡れた桜の

濡れた桜の

アレサ 花が散る

逢いたさ見たさに 北山しぐれ

空は晴れても

想いは晴れぬ

心狂うたが

心狂うたが

アレサ 無理かいな

いとし清十郎の あと追いしぐれ

泣いておゆきあれ

泣いておゆきあれ

思い増位の

思い増位の

アレサ 峯越えて

(タイヘイ、大村能章作編曲)

飾磨みなと節

飾磨ナ ヨイトコシヨ

空は五月の 萌黄に晴れてヨ

港展ける 港展ける

御稜威ヨイヨイ日の光

(合唱) ソレ 唄えや踊れや

出船入船 びんころしやんく

宝船

飾磨ナ ヨイトコシヨ

姫路婿さで 飾磨は嫁御ヨ

城と港と 城と港と

仲のヨイヨイ手を引いて

飾磨ナ ヨイトコシヨ

浪に家島を 抱寝に染めてヨ

着せてやりたや 着せてやりたや

振もヨイヨイあの娘

飾磨ナ ヨイトコシヨ

今も昔も 片葉の草はヨ

可愛い出船に 可愛い出船に

濡れてヨイヨイ 身をよせる

(タイヘイ近藤十九二作編曲)

佐渡しよんがい

ハア一磯の千鳥と 他国の人はヨ

ヨイヨイヨイヤサット

吉い月夜にくく しよんがいな

え、逃げてゆく しよんがいな

合唱 (佐渡は四十九里 波の上)

ヨイヨイヨイヤサット

ハア一佐渡は夕焼 羽田の浜でヨ

ヨイヨイヨイヤサット

別れ煙草がくく しよんがいな

え、目に泌みたしよんがいな

合唱 (末は鴉の泣き別れ)

ヨイヨイヨイヤサット

ハア一化けてござれよきれいな人にヨ

ヨイヨイヨイヤサット

おけさ猫ならくく しよんがいな

え、なお可愛いしよんがいな
合唱 (佐渡は満月金の波)

ヨイヨイヨイヤサット

(タイヘイ近藤十九二作曲)

姐御がらす

女だてらに道中差を

抜けば人斬る 啖呵切る

それも誰ゆえ あの人ゆえに

姐御がらすのヨ

しよんがい ひとり旅

どうせあの人流れの雲よ

どこまで続く 旅の空

わたしや涙の 後追い鴉

五十三次ヨ

しよんがい 啼いて飛ぶ

三ツ山音頭

おひかえなさんせ 卷舌仁義

男まさりの道中も

暮れりややつぱり 淋しい女

思ひ出させるヨ

しよんがい 夫婦星

(タイヘイ寺島真一作曲)

城は国宝 祭りは総社

合唱 マイランセ ヨーイトナ

卯月なかばのくく 花ざかり

合唱 マイランセ ヨーイトナ

トコヨーイトヨイヨイ三ツ山

二十一年 一度の祭り

合唱 マイランセ ヨーイトナ

逢うてうれしや〜 三つ山
合唱(同じ)

〜唯し 東のお山にや 仁田の四郎

西のお山にや 俵の藤太

中のお山にや 源氏の頼光

合唱 ヤレ曳け ソレ曳け

エライヤツチャ ボッコイヤツチャ

七日七夜き 踊ろじやないか

合唱 マイランセ ヨーイトナ

姫路繁昌の〜 揚げ花火

合唱 マイランセ ヨーイトナ

トコヨーイトヨイヨイ三つ山

板谷隆一作曲

桑原三智夫編曲

テイチク小唄勝太郎歌

オーライ節

姫路よいとこ 市バスの窓に オーライ〜

花のお城がほのぼのと

オーライ〜 ほのぼのと

オーライ〜 ほのぼのと

花の千姫 色香で招く オーライ〜

市バスガールは唄で呼ぶ

オーライ〜 唄で呼ぶ

オーライ〜 唄で呼ぶ

旅はほがらか 市バスでゆけば オーライ〜

日本国中 花ざかり

オーライ〜 花ざかり

オーライ〜 花ざかり

瀬戸の白帆に 淡路も暗れて オーライ〜

唄でとぶとぶ市営バス

オーライ〜 市営バス

オーライ〜 市営バス

あついロマンズ 温泉の情け オーライ〜

結ぶ市バスの たのもしさ

オーライ〜 たのもしさ

オーライ〜 たのもしさ

今日も市バスであの娘に逢うた オーライ〜

恋のストップ ままならぬ

オーライ〜 ままならぬ

オーライ〜 ままならぬ

向う通るは市バスじゃないか オーライ〜

お夏清十郎の 恋のせて

オーライ〜 恋のせて

オーライ〜 恋のせて

市バスどこゆく 豊年日和 オーライ〜

播磨名どころ ひと巡り

オーライ〜 ひと巡り

オーライ〜 ひと巡り

ドアを開いてあの人のせて オーライ〜

市バスガールは 果報者

オーライ〜 果報者

オーライ〜 果報者

姫路栄える観光バスの オーライ〜

伸びる轍に 光る風

オーライ〜 光る風

オーライ〜 光る風

お城恋しや

ハアー コリヤ コリヤ コリヤ

姫路さかえる コラシヨ

城若がえる ヤッコラサノサ ソレ

日本一の天守閣

夢にうつつにヨ
睨にかぶじや

ないか ないか ないか

(以下囃し繰返し)

天守恋しや

また逢う日まで

花の千姫さびしから

つのもる想いのヨ

お化粧やぐらじや

ないか ないか ないか

お城世なおし

あの建てなおし

烈女お菊の心意気

皿の数ほどヨ

数えて待とうじや

ないか ないか ないか

お城まつりの

名残りは尽きぬ

お夏清十郎の深なさけ

恋の菅笠ヨ

そろうて踊ろじや

ないか ないか ないか

(ポリドール梅村初栄作曲)

あ、白鷺城

紅の 桜ヶ丘を

白鷺の 舞い翔つ姿さながらに

あ、うるわしの 天守閣

へ古城の宴 歡樂の

花をかざして 一さし舞おうよ……

往古の 矢弾のひびき

松風の 調べとなりて消え残る

あ、なつかしの 七橋

へ古城の歴史 盛衰の

涙た、えて 一さし舞おうよ……

天正の 五三の桐に

元祿の 揚羽の蝶も来て遊べ

あ、あこがれの 白鷺城

へ古城の聲 英雄の

笑をうかべて 一さし舞おうよ

吉田矢健治作曲

(キング白石十四男編曲)

春日八郎 歌

昔の夢のよみがえる

へ花の千姫 お化粧やぐら

月もひとさし 舞うたトセ

へ鷺がさわげば お夏も狂う

月も清十郎も 瘦せたトセ

へ恨み深まる お菊の井戸や

月もお皿に 化けたトセ

月冴ゆる古城のほとり

千年の松の木肌や

石垣に手ふれてひとり竹めば

盛衰の昔の夢の幻の

あえかにへああえかに

昔の夢のきえのころ

板谷隆一作曲(琴 合奏曲)

中本和風作曲(尺八独奏曲)

坂東 大蔵振付

古城幻想

ふるさとの古城のほとり

らんまんの花の宴や

高殿に月の光の照りそえば

歡樂の昔の夢の幻の

ほのかにへああほのかに

清水小唄

色は匂へど 清水の
桜いとしや 散りぬるを
オヤ 観世音

花のおん顔 拝みたや
(こころ 安来のダンダンネ)

わが世 たれぞ 清水の
鐘を聞くさへ 常ならむ
オヤ 山の宿

極楽浄土の 風が吹く
(こころ 安来のダンダンネ)

有為の奥山 清水の
紅葉惚れぼれ 今日越えて
オヤ 展望台

隠岐も安来も 夢うつつ
(こころ 安来のダンダンネ)

浅き夢みし 清水の
雪の肌へに 酔ひもせず
オヤ 奥の院

浮世はなれた 美しさ
(こころ 安来のダンダンネ)

ん(運)が湧くわく 清水の
町は栄える 山ア繁る
オヤ 総おどり

いろは四十八 総おどり
(こころ 安来のダンダンネ)

〈昭和二九年 安来市依願〉

新姫路シャンソン

袖に白鷺 抱寝に染めて
裳は桜の 紅霞

昔なつかし 千姫さまよ

化粧やぐらの
リラ あで姿 リラランランあで姿

競馬景気に 沈んで浮いて
百万ドルの 人の波
夜は流れて あの娘の膝へ

泳ぐ魚町
リラ 夢の町 リラランラン 夢の町

涼し白浜 遠浅なれど
いとしお夏は 深なさけ
モダン清十郎は 電車で通う

シャツがよう似た
リラ アロハシャツ リラランランアロ
ハシャツ

天守閣から 播磨灘見れば
飾磨 広畑 妻鹿 網干
港々がスクラム組んで

復興させます

リラ 大姫路 リラランラン 大姫路

城は夕霧 港は夜霧
家島がよいの船が出る
別れともない 吸いつけ煙草
とても涙で

リラ 火がつかぬ リラランラン火がつかぬ

粋な角帽に もう逢う時分
ラッシュエアワ一の二階町
わたしストッパ あのひとゴーよ

恋の十字路
リラ なんとしよう リラランランなんとしよう

花は白国 色香に迷う
思い増位の梅林館
きみとアベック あのリンクタで

ゆけば野里の
リラ 燈がまねく リラランラン灯がま
ねく

絶社、十二所 願かけましょか

皿に恨みのかずかずを

泣いて数える 面影かなし

月もお菊の

リラ井戸にさす リラランラン井戸にさ

す

さすが市川 日本一の

水に晒した 器量よし

浮名流せば はずかし うれし

噂高木の

リラ 白糍し リラランラン白糍し

朝日に仰ぐ 白鷺城は

姫路さかえる シンボルよ

若い命の 大空高く

そびゆる理想の

リラ 天守閣 リラランラン 天守閣

アーケード行進曲

あの店、この店

あふれる笑顔

アー アー アーケード

アーケード

若いセンスで 唄おうじゃないか

ララン 唄おうじゃないか

横のデパート

明るく伸びる

アー アー アーケード

アーケード

花のパンセで 踊ろじゃないか

ララン 踊ろじゃないか

街のオアシス

涼しいドーム

アー アー アーケード

アーケード

夢のタッチで 逢おうじゃないか

ララン 逢おうじゃないか

雨が降っても

ドライで楽し

アー アー アーケード

アーケード

軽いテンポで 行こうじゃないか

行こうじゃないか

〈オリオン桑原三智雄作曲〉

やぐら屋の娘

城は歌麿 夜桜染めて

ゆらぐ雪洞 ヤグラハラハラ花の肌

おさと可愛いや 城下町そだち

七ツ櫓の エーヤグラヤグラ屋の娘

城は姫山 お夏の情け

いとし清十郎は ヤグラソレソレ男山

おさと唄えば 菅笠ぶしも

昔ながらの エーヤグラヤグラ屋の娘

城は時雨 ああ唄きけば

踊りながらに ヤグラホロホロ泣けてく

る

おさと泣きやるな 照る日も曇る

暗れておくれよ エーヤグラヤグラ屋の

娘

城は昔の あの松影に

忍ぶ横櫓 ヤグラサラサラ 束ね髪

おさとおもえば 昔が浮かぶ

八日月夜のエー ヤグラヤグラ屋の娘

城は姫路の 藤むらさきに

恋は男の ヤグラヤグラ屋の娘
おさといとしや 朝焼け小やけ

もえてはすかしエー ヤグラヤグラ屋の娘

(タイヘイレコード)

国民歌、会歌、校歌その他

ペン仲間の歌

(城ペンクラブの歌)

ペンのたこなら
ペンのたこなら

仲間は誰れでも持っている

酒の香がないときも――

ペンのたこならひとつずつ

仲間は誰れでも持っている

ヤロウゼ ヤロウゼ

天守閣から

天守閣から

仲間は誰れでも翔びたがる

ペンに翼が生えたなら

天守閣から青空へ――

仲間は誰れでも翔びたがる

ヤロウゼ ヤロウゼ

猿になりたや
猿になりたや

仲間は誰れでも夢を喰う

十五夜の晩の月の出に――

猿になりたや金色の

仲間は誰れでも夢を喰う

ヤロウゼ ヤロウゼ

(真下 恭 作曲)

龍野ロータリークラブ歓迎歌

ようこそようこそ ロータリアン

今日の思い出 いつまでも

どこで会っても 笑顔でヨウ

ヨウト 手を振ろう 世界の仲間

輪 輪 輪となる

龍野ロータリー

(酒井喜久男作曲)

播磨燐寸音頭

ハア―城は白鷺 燐寸は播磨シユットネ

柚木ア自慢のくさわくるみ ソレ

ハシユツシユツシユツトステ

シユット まわれ

播磨燐寸で シユット まわれ

ハア―燐寸かわいいや 箱入娘シユットネ

誰がスルやらく燃やすやら ソレ

ハシユツト

ハア―めでためめでたで三羽の鶴がシユットネ

お家繁昌のく舞を舞う ソレ

ハシユツト

ハア―安くお早く 多くの人にシユットネ

力あわせてく よい品を ソレ

ハシユツト

ハア―馬と鶴とが海山越えてシユットネ

世界平和のく 灯をともす ソレ

ハシユツト

(播磨燐寸KK囃による)

老人会おどり

(手柄山養寿園音頭)

松は ヨウ めでたいなア

松は 老松 お城は 古城

めでたい めでたい

ホんに めでたい 老人会

生きて めでたい 老人会

めでたい めでたい めでたいなア

ちよいと ヨウ たのしいなア
ちよいと 手柄の お山へおいで

たのしい たのしい

ホニに たのしい 養舟園

生きて たのしい 養舟園

たのしい たのしい たのしいなア

昔 ヨウ うれしいなア

昔ばなしの 花咲き揃て

うれしい うれしい

ホニに うれしい 老の春

生きて うれしい 老の春

うれしい うれしい うれしいなア

皺も ヨウ あかるいなア

皺も 白髪も 伊達には 増えぬ

あかるい あかるい

ホニに あかるい 生字引

生きて あかるい 生字引

あかるい あかるい あかるいなア

亀の ヨウ めでたいなア
亀の甲より めでたいものは

めでたい めでたい

ホニに めでたい 年の功

生きて めでたい 年の功

めでたい めでたい めでたいなア

(桑原三智雄作曲・坂東大蔵振付)

姫路市連合婦人会音頭

今日のよろこび

お城にあつめ

菊と桜が

いちどにさいた

心合わせて

ヨイヤナイカヨイヨイ

姫路連合婦人会

慰霊塔なら

手柄の丘に

祈る平和の

いついつまでも

命照らして

ヨイヤナイカヨイヨイ

姫路連合婦人会

わたしや広畑

あの熔鋳炉

愛の焰は

鉄をもとかす

誠燃やして

ヨイヤナイカヨイヨイ

姫路連合婦人会

姫路さかえる

生活のかけに

光るおんなの

貴い力

情溢れて

ヨイヤナイカヨイヨイ

姫路連合婦人会

明日のあこがれ

瀬戸内海に

そ、ぐ市川

あかるく清く

操讀えて

ヨイヤナイカヨイヨイ

姫路連合婦人会

(姫路市教育委員会依頼)

野里小学校五十周年讃歌

1

青い空 あこがれの

仰ぐ城 よるこびの

朝よ この日よ

あ、 たのし たたえん ララ五十周年
あ、 うれし 歌わん ララ五十周年
野里 野里 ララララン
野里 小 学 校

2
光る風 なつかしの
薫る花 思い出の
窓よ 母校よ

(以下くりかえし)

3
蜜飛ぶ 市川の
雪積る 姫山の
友よ 月日よ

(以下くりかえし)

(昭和二八年、塚本熊市作曲)

野里小よいこ音頭

1

ヨイヨイヨイヨイ なにがよい
春は桜の 一城がよい
まだまだ ヨイヨイ なにがよい
花のかずほど にこにこと
野里ヨイヨイ よいこがにこにこと

2
ヨイヨイヨイヨイ なにがよい
夏は 海水浴がよい
まだまだ ヨイヨイ なにがよい
貝のかずほど いきいきと
野里ヨイヨイ よいこが いきいきと

3
ヨイヨイヨイヨイ なにがよい
秋は豊年、月がよい
まだまだ ヨイヨイ なにがよい
稲のかずほど のびのびと
野里ヨイヨイ よいこが のびのびと

4
ヨイヨイヨイヨイ なにがよい
冬は正月 雪がよい

まだまだ ヨイヨイ なにがよい
餅のかずほど まるまると
野里ヨイヨイ よいこが まるまると

四郷小学校校歌

1
朝明の 麻生の山に
湧きあがる あの雲ごらん
光る子 よい子 仲よく勉強

一、二、三
四郷、四郷、四郷小学校

2
市川の 流れて瀬戸の
海に入る あの波ごらん
はねる子 よい子 明るい号令

一、二、三
四郷、四郷、四郷小学校

3
国宝の 白鷺城に
咲き揃う あの花ごらん
笑う子 よい子 みんなの友情

一、二、三
四郷、四郷、四郷小学校

東光中学校生徒徒歌

1
春爛漫の花吹雪
古城のほとり彷徨えば
嗚呼！英傑の面影の
若き暎に甦る

2
若き暎に甦る
五三の桐の校章を
秀でし額に はた胸に
嗚呼！夢多き若人の

燃ゆる血潮を君しるや
燃ゆる血潮を君しるや

3

夏溼刺の瀬戸の海
秋清涼の市川辺

嗚呼！かく学び鍛えたる

紅顔匂う東光生

紅顔匂う東光生

4

冬峻烈の霜の径

通う三とせの春近く

嗚呼！中学の業就りて

母校を巣立つ悦しきよ

母校を巣立つ悦しきよ

東光中学校応援歌

雲広峰に凍る日も

烈日城を焦がす日も
精神を鍛え技を練り

えいえいおう 東光が

待ちに待ちたる 暗れの日ぞ

えいえいおう えいえいおう

意気いや高く天を衝き

覇気はやすでに敵を呑む

必勝五三の桐の旗

えいえいおう 東光が

振りに振りたる 応援ぞ

えいえいおう えいえいおう

えいえいおう えいえいおう

えいえいおう えいえいおう

えいえいおう えいえいおう

えいえいおう 東光が

勝ちに勝ちたる

我も拍手す彼の美技

ありと知れく

ヨイシヨ 広嶺の旗じるし

負けじとまがるマガリキ

負けじとまがる斗魂が ヨイシヨ

掴むチャンスのおもしろさ

おもしろさく

ヨイシヨ 広嶺の大勝利

涙で握る腕と腕

勝ってカブトの緒をしめて ヨイシヨ

あすまた逢わん好敵手

好敵手く

（板谷隆一作曲）

彼も讃えよ我が勝利
校旗囲みて感激の

えいえいおう 東光が

耐えに耐えたる 熱涙ぞ

えいえいおう えいえいおう

広嶺中学校「応援音頭」

1

ヨイシヨ 広嶺の若桜

はるかに望む白鷺城

眺あかく咲きそめし ヨイシヨ

花の選手の意気を見よ

意気を見よく

ヨイシヨ 広嶺の朝ぼらけ

くれない燃ゆる雲のいろ

胸をたいて叫ぶとき ヨイシヨ

われに勝算ありと知れ

短詩

雪の降る夜
静寂の空
星の光
遠くを照らす
心は静かに
眠る

春の風
柔らかな
頬を撫でる
花の香
空を漂う
心は軽やかに
舞う

アトム之眼

昭和二十四年

古い將校マント
きちんと畳んで
縊る

防寒靴も
ぬいで揃えて
縊る

赤鉛筆
雪に突き刺して
遺書はない

日本の凍石
蹴って蹴って
縊る

(赤鉛筆)

欲情する
コップの内
と外
の虫

秋の灯を
点けても……
消しても……
卵が一個

ころがせばころがる
卵

寝蓐まで

失業の

指を

小鳥に啄かせる

柱時計のネジまく
秋の夜

飢えて――

誠首の

秋

時計の針とめてみる

秋の夜の
なおらぬ時計
バラバラに……

秋風に

芋買う

拾円札ヒラヒラと

葉鶏頭の終わりの
寡婦の

青メガネ

人妻おそく起き
かたつむりの殻の

脆さ

雪の朝

指は

もう蛇ではない

さようなら……

車窓の雪で

ゆうべの指洗う

雪国の

指の

秘密を

手袋に――

リンゴの

青い皮膚を

ザクリと食い破る

リンゴ屋

銭かぞえ
リンゴ並べなおす

シンフォニー

凍蝶

動くともなく――

動く――

霜の夜の

河豚

歯をかたく閉じている

河豚を刺ぐ

庖丁の顔に

ドキンとする

栗の陰影

みんな垂に

寄りかたまっている

カリエスの疼き
いびつに
ころぶ栗

折るとき

十指の

枯木

天を指す

落葉のしたに

水流れ

落葉のうえに

落葉つもる

陽と

月と

重なる

コロナのように――

日蝕の

断層のぼる

玄蝶のように――

氷碎って

たそがれの掌

ガツガツ洗う

虚空

鉄のベンチに

雪おとす

かなかなよ

囚人

思慕の紐

つなぐ

むらさきの

龍膽

壺の

むらさきに

台風のきざし

ひそかに

蜘蛛くだる

蜘蛛の雄

びくびく挑む

食われながら

台風の

電柱を下りてこない

浮浪児

浮浪児が

真中に行く

台風の街

水くぐる

児のちんぼこ

藻にふれて

炎天の
牛の目が
牛を見る

炎天の
時計台
ガガンと狂う

月の干潟
赤い手の蟹
あまた患む

死に近い
子の掌に
蛍匍わしてやる

子の臨終
蛍

〈台風季〉

逃がしてやれという

蛍逃げて
もう
なにもない
掌をとじる

死に近い
子に

鏡の月
見せてやる

年輪

暗く

樹液

燃え

眩く

青銅の

鶴

噴水感情
奪われ

〈青銅の鶴〉

もうなにもない
冬庭の
明るさ

クリスマス
黒人は
黒人の歌
うたう

ひびの草

琴かきならし

琴を売る

〈琴を売る〉

冬
斜陽の
ヴィナスの手に指紋がない

木枯が
もぎとるように
琴を売る

桐の葉も
みな落ちつくし
琴を売る

眼帯の闇に
火焰の
独楽廻る

塞がれた

瞳孔

朱塗りの独楽

秘める

碧血の独楽を

無暗に
しかと見さだめる

點眼の虚空に
独楽が
しいんと燗む

眼底の
愛憎の独楽
日々に
消えてゆく

ついに癒えなかつた
目に
空転る
劫の独楽

失明の殺那
愛欲の独楽
倒れる

独楽さぐる

心よノ
掌よノ
はてもない
眼となる

心眼の
鍵
独楽の芯
光る

天心に
盲の独楽が
澄んでいる

深沈と
雪がふりつむ
真夜のいのち

〈盲の独楽〉

きいている

更けてゆく夜の
雪に
しいんとききいる
死のブルス

死ぬならば
般若の
真雪
食いながら……

雪を
食おうよ
劫の
旅路の
喉の灼け

往き——
還る——

吹雪のちまた
四十年

指紋

踏切番
旗振らず
軍用列車
西へ——

菜種畑
ゆすぶり散らし
軍用列車
西へ——

軍用列車に
妻も子も立ちどまる
遮断機の前

〈死のブルス〉

〈遮断機〉

マツカアサーの
帽子を濡らす

雨……

散るときに

花散る

レジスタンスの

雨……

マツカアサーの

泥靴

花びらを踏む

サクラ散る

黄昏の雨に

マツカアサー

軍服を脱ぐ

桜散らし

マツカアサー去る

爆音
絞り縮まる
日本

(マツカアサー罷免)

牛なき

打たれ

屠所のカンナ

牛の目に

蠅

はりついたまま

殺される

牛の首

転がり

炎天に

クワツと目むく

雷近づき

つぎつぎ

屠られてゆく牛

稲光り

裸で

牛裂く男

夕立に

牛の内臓

洗う

裸の婦

ドブのんで

昼寝

牛殺しに

蠅たかる

からすき

河豚鍋に

裏切り多き

顔ならぶ

よくしゃべる

舌一面

芒かな

夏瘦の子

酸漿の頬

絞る

癒ゆ妻へ

酸漿

口づけに移す

青梅の

(屠殺場にて)

緑陰
墮胎を肯んぜず
囀れる

天へ向け
松の葉
露を刺す

囀りの
なかなる寺に
——泊る

春曉の
夢いっばいに
囀れる

囀りの
だらだら麓
温泉へ三丁

野天風呂

陽はさんさんと
囀れる

結氷する
噴水感情なき
訣れ

虫逃げて
もう何も無い
掌を閉じる

風光る
城の
断層
のぼる蝶

初夢もなくして
ししむら寒き
——妻

花あらし
抱けば
雌豹となる媚態

「俳句十人集」抄

体温計
三十八度の目盛に
寒卵

再軍備の
ニュース聴く
体温計

寒卵
カラリと
割らる
白磁器に

注射針
冬蝶を
壁に刺す

蝶
凍て
開かぬ窓

拳
義足殴る
戦後の虚

義足の
足巾が
雪にしるされて

生きている足
死んでいる足
交互に
雪みだれ

銃声に
セバード
冬林駆け抜ける

冬林の
セバード
マダムに
明るすぎる

ボート
囚人のごと
繋かれ
凍て

地震つゝの時
狂人
しいんと坐る

雲

ふたたび
昆虫の斑に
翳る

大塚あき作品

詩

堺町拾九番地

かつてここに狸々荘は在った

わたしたちが先祖から受け継いだ家である

ここにはこんこんとして盡きせぬ狸々の酒瓶

があった

永い永い戦争中にもこの酒瓶は満ち溢れた

蜜に集る蜂のように

狸々荘は明け暮れ悪童どもで賑わった

悪童どもは詩に酔い酒に酔い唄に酔った

ああ 遂に狸々荘の酒瓶も渴れるときが来た

悪童どもは一人去り二人去り姿を消していつ

た

そして狸々荘も高利貸の手に渡ってしまった

今宵 ひとりコップに注ぐいっばいの焼酎か

ら

立ちのぼる酔夢の中に

今はもう悪童どもの面影を一人一人思い浮か

風

太陽のめぐみも木の葉のささやきもないアバ

ートの一室

それでも南の風の吹くころには

どこからともなく花の便りをささやいてくれ

る

春も去り 夏も過ぎ

私は私の孫たちのために何度もお祝の包紙を

買いに走ることだろう

月の光も草の露もないコンクリートの露路隅

で

どうして虫は鳴くのだろう

遠い遠いところから北風が運んで来るのだろ

うか

私の書いた長い長い歳月の便りを 私の生命

の便りを

ただもう北風がその冷たい手で吹き散らし

この私の人生の吹溜に拾い集めてくれるだけ

である

た

そんな昨日今日

アパートが売りに出された

私は故しらぬ不安に胸がキューンとした

「虫籠が売られる 虫籠が売られる」

ただもう私は

そんなことをつぶやきつづけるのだった

師走の風が身にしみる夕暮れだった

虫籠

満潮のたより

人差し指で壁をぐつとぐつくと

はれものの頭をおさえた時のように

ぶよぶよとしてそのまま向こう側へ突き抜け

そうだ

棚の上に少し重い物をのせると

棚の下の敷居がしななって

窓も襖も動かなくなる

そんな虫籠のようなアパートに移り住んで

早やもう十年がすぎた

この十年の歳月は

海辺の岩陰に

牡蠣はひっそりと生きている

満潮には

小魚たちが 殻についた藻にたわむれながら

……

遠い南の海で鯨の赤ん坊が生まれたことや

今もまだ深海に眠りつづけている

難破船の剣や大砲や宝物の話をきかせてくれた

この頃ゆくりなく知りあって親しくなった彼腕の良い職人でありながら最初の結婚に破れ彼の放浪がはじまった住所を職を転々とかえた無一文でこの地の市役所の清掃人夫になったある日そんな彼が突然結婚したこれで落ちついてくれたらと思っていたのにふいに又いなくなったやっぱり性来のボヘミアンだったのかなああれこれ忘れられるともなく忘れかけたとき彼等夫婦がひょっこり現われた奥さんを入籍したこと赤ん坊が産まれたこと等々

私は何度も何度もおめでどうをいった牡蠣はもう大海を遊泳する夢も見なくなりただもう満潮のたよりを待っているだけであつた

水死人

あ、もう十年になる
私たちが破産したのは
私たちがまだ盛んだった頃
従兄弟の富豪は
「資金が入用なときはいつでも融資する」と
と何度もいつてくれた
その言葉に一累の望を托したが
「死金はいつさい使わぬ」
とにべもなく拒否された
死金とは？
生金とは？
一体何だろう！
泳ぎの達者なものには
「舟も貸そう」「金も貸そう」
とということだろうか？
水死人を見ると胸がいたむ
やっぱり泳げなかったのだらう

断頭台の下で

断頭台の下で
幼子は歌い笑っている
少女はやわらかな髪をすき
もつと美しくなるために懸命に化粧する
青年はネクタイを気にしながら
少女のほ、えみを待っている
太陽がやわらかな光をなげる頃
私は生まれてくる初孫のために小さな初着を
縫い続ける
可愛らしい命は
どうしても脱がすことのできない
経かたびらを着けて生まれてくる
私はその上を
赤い花模様の初着でくるむだらう

助けてくれと叫んだことだらう
藻にでもすがりつきたかったことだらうに
あ、暎の底に沈んでいる
十年前の私が見える 見える

終着駅

切符に一枚ずつ缺が入れられた
人々はこの車に乗せられた
宇宙船より速いスピードで突っ走る車
現在を過去に
未来はたちまち現在に
一瞬にして吹飛んでゆく
あれもこれも
仕残したことばかり
だがこの車は一刻の後もどりも許されない
車掌が大声で叫んでいる
「もう終着駅ですよ」

ブラットホームの花を
一輪ずつ取って下さい」

色も香りも形もない。その花を

私は、オロオロ探している

どうしても取らなければならぬ。その花を

猿の最期

私の父母も祖父母も

六十才前後で、それぞれ他界した

私もそろそろ、そのときを考えねばならない

私は私の遺体を最も有効に用いたい

私は私の遺体を進呈したいと思う

私の目、手、足、E.T.C. E.T.C.……

それが不幸な誰かの不足を補うことができ

ばと思う

私の目が、私が一度も顔を合わせたことのない

人の為に新聞を読み

私の手が、私が一度も口をきいたことのない

人の為にコーヒーを口に運ぶ

私の足が、私が一度も訪れたことのない人の

為に出勤時刻を気にしている

私の心臓が、一度も手をふれたことのない人

の為に青春の血をたぎらせる

そんなことを考えると

とてつもなく愉快である

帝王

我在りて我が世界は始まる

まことに私は私の世界の帝王である

ある時、私は私の営々と築いた歡喜の高峯に

君臨し

又ある時、私は私の悲しみの満ちた涙の深

淵に沐浴する

私は私の喜びの峯に他人の足跡を許さない

墓碑

私は私の悲しみの淵に他人の姿を映すことを

好まない

私は私の世界の孤高の帝王

喜びと悲しみの間を日も夜もかけめぐる狂人

はく

永い間、夢ばかり食べていたので

私のまわりの夢の木は

もう、すっかり枯れてしまった

でもおかしいのです

子供達は

夢の木ならいつばいあると言うのです

青や赤の実も沢山ついていると言うのです

でも私には

もう、それが見えない

私は毎日毎日石を磨いている
この石は

富豪の庭の千年の歴史を語る石でもない

貴婦人の小指に輝く宝石でもない

誰も手に触れようともしない

ごくつまらない石である

気まぐれで

強情な、この石は

時には執拗に私のみをこぼみ

時にはあつ気なく欠落する

今日も私は石を磨く

私のいのちの終わるとき

この墓碑は完成し

墓碑は又、私とともに消失する

赤ちゃんの虹

小さな孫娘が
息を切らせながら私にいった

「赤ちゃんの虹が

たとんとたとんと出来たヨ

クルクルが

ポシヤンポシヤンとひいていったヨ

雨上がりの道路に小さな水たまりができて

自動車の落としていったガソリンが

ギラギラ光っていた

私は この小さい孫娘が

どんどん 虹をみつけたり

消したりして成長してゆくだろうと思った

矛盾

その小さなアパートの部屋に
まったく不似合いな

大きな佛壇が でんと据っている

私は元来

佛様は佛壇のなかに

神様は神棚に

とは毛頭思っていない

とはいえ

御命日には花を供し

供物をそなえる

もつとも僧侶の顔を見てから

大あわてにあわてて

供物を買いに走ることも再三ならずある

人間はあるとき

ものあわれを覚え

やさしい心遣いをする

その時私は神様になり

古着

又或るとき
邪心猛襲に身を焦がすことがある
その時私は悪魔になる
そのように私なりに思っている

時間

時間はふしぎな魔術師
うれしかったこと
かなしかったこと
殺してやりたいと思ったこと
死んでしまいたいと思ったこと
みんな美しい寶石に変えてしまった
時間は巧みな研磨師
綺麗に磨いてカットして
素晴らしい宝石の首飾りにしてしまった
私はこの首飾りを
いつも掌てのひらであたためている

私はよく知人から古着を贈られる
私は若いときから流行には無関心である
そんな私が貧しくあわれにしよぼくれて見え
るらしい

今日も私は膝の抜けた古着につきをしなが
ら……

この着物を贈ってくれた友人は
主人がほかに愛人をつくって
現在も別居生活をしていることに
なんとなく思いをはせているのである

花輪

日本一のセールスマン
一ヵ月に何十台もの自動車を

売りさばくベテランセールスマン
何年か後に

何億もの財産をつくることが
彼の最後の目的であり

彼の葬式に

盛大な花輪の列を並べることが
最後の希望であること

彼は又

花輪の数が

その人間の価値を示すものだという
そうかなあ

と私は思う

私は私の死に

一輪の花

一本の線香も

不要である

一滴の涙を注いでくれるものが

一人でもいてくれたら

私はそれで満たされるだろう

サリドマイド

行きずりに

ふとすれ違った娘さん

左手に買物籠をさげていた

右手は短く小さく

胸のあたりまでしかなかった

私はドギリとした

ふり向くまいと思つた

一〇メートル程行き過ぎて

私はどうとう振り向いた

くつたくのない

さわやかな足どりで

遠ざかる娘さん

私はあゝ良かったと思つた

影

すっかり影がうすくなつたと言う噂を

わざわざ私に知らせてくれた人がいる

多分 私が破産したからだろう

大統領も横綱も明日の日は解らない

と 私は思う

私は道を歩くとき

視線を爪先に落として考えごとをしながら

ゆっくりゆっくり歩く

真昼の太陽の下で私の影は

短く小さく

だが はっきりとついていた

顔

沢山の顔をもつた佛さま

あなたの心は一つですか
私は貧しい商人
好ましい人
はき捨てたい人
種々雑多な来客に
それぞれ異つた顔で応待する
一日を終えて
永い間泥水のなかを泳がせられた魚のように
くたびれて くたきたになつたとき
かくれていた私の顔がかえってくる

アポロ（宇宙飛行船）

どん欲な人間が

何億年もの

永い

永い

年月を閉ざされていた

天空の扉をひらいた
そこに夢と詩と
神秘に包まれて眠る月の女神を
犯した
夜空にひかり輝く宝石がひとつ
人間の手で打ち砕かれた

短刀

大東亜戦争は悲劇に終わり
私は唯一人の弟の生還を祈っていた
突然 その弟が
私の家を訪ねた
私は喜びで有頂天になった
翌日 弟は
故郷へ墓参にゆくと行って
帰っていった
私は弟のそのような行為を

ゆかしいものと思った
電車の発車間際

「姉さんと会えるのも
これが最後になるだろう」
と いった
ひどく気になることばなので
何度も問い糺したが
笑って答えなかった
日を経ずに弟の死が知らされた
弟は短刀で自殺してしまったのだった
そのとき以来
その短刀は
私の胸につき刺って抜けない

靈魂

弟の死で兄が東京駅へかけつけた
タクシーに乗った

弟の住所地図を示した
この運転手は一日前に
弟を乗せた運転手だった
弟と運転手は途中何度も下車して
食事をしたり
飲み物を攝ったりした
「別れる時に果物を一籠土産にもらいました」
運転手はそんな話をした
兄は「それは弟の靈魂が導いたのだろう」
と いった
若い弟がこの運転手とどんな話をしたのか
私は知りたいと思う
その運転手と会って話したいとも思う

つきつぎにできては
クシャツと消えてゆく
ポツツとできてクシャツと消える泡
まるで人の一生みたいだ

孫

手足を伸ばして
大の字になって眠っている
可愛らしい手足に小さなえくぼが並んでいる
この小さな足でどんな険しい崖をよじ登るの
だろう
そこでは立派な花の咲く木を見つかるだろう

煮豆

クツクツクツ豆を煮る
大きな泡や小さな泡が

この柔らかな手で
どんな美しい宝石を掴むのだろうか
私はいつまでも
この小さな可愛らしい手を足を

撫でていてやりたい

子守唄

ねんね猫の尻 蟹がはいこんだ
さっぱり訳の解らぬ唄である
私が小さいとき
祖母の背中で聞いた子守唄である
のどかなねむ気を誘う唄である
暑いときにはそよ風のように
そよそよとほおをなでる唄である
寒いときには湯気のように
ほかほかとかからだを包む唄である
私が祖母の背中で眠ったように
私の孫が
私の背中で安らかな寝息を立てている

歯

歯ぐきがやせてしまったので
歯に隙間がたくさんできた
食べ物に隙間にはさまって
まったく厄介である
前歯の一本がガクガクうごく
ちよつとつまんでギリギリと廻せば
わけもなく抜け落ちる歯である
こんなうすら寒い季節
突然 若い時からの親友が自殺してしまつた
数をます老の歯にわびしい思いの私を
冥府の彼はなんと眺めていることか

ほくろの女

うすいとがった口許に

黒い蜘蛛が吸いついている

唇をつき出して

機関銃のように喋り出すと

蜘蛛は競いたって

黒い糸を吐き出す

私らが生活に破れたとき

その蜘蛛は電波のように黒い糸を吐き出して

哀しい噂をひろめていった

小さな借家に移り住んだ

ここにもそんな蜘蛛がいた

うすいとがった口許に

黒い蜘蛛の吸いついた女

プロペラのようにしゃべる女

私はこの女を充分注意していたのに

ともすると

つい 黒い糸にひっかかってしまうのだった

前歯

永い間ガクガクしていた前歯が
今日なんの痛みもなく抜け落ちた
前歯の抜けた顔は
急に老人くさく貧相になった
小さいとき
上の歯が抜けると雨だれ落ちに埋めた
下の歯が抜けると屋根の上にはうり上げた
そうすると
新しい白い歯が生えるときかさかされていた
そんなしぐさを思い出しながら
私はこの抜けた歯を紙に包んで
紙くずかごに捨てた
うすら寒い夕暮れだった

私の家は金細工屋である
 十本の指に余る指輪をつけてくる女
 二十五ゲージにサイズを直せという人
 私の足の親指でもそんなに太くはない
 私はサツマイモにダイヤをつけるのは
 あまりいい趣味ではない
 といいたいのを辛棒する
 四十カラットもあるダイヤを持って来る人も
 いる
 すりへった爪
 節くれた指
 ざらざらに荒れた掌
 小さいがグンと握力のある私のこの手を
 私は秘かに誇りに思っている

或る養老院から
 遠縁の老人の死が知らされた
 私は急いで家を出た
 幾十の消えがての火を包んで
 ひっそりと静まり返った白い建物
 老人は部屋の内角に横たわっていた
 その指に高価な宝石をきらめかせ
 ビリヤードに夢中になった手
 長靴を蹴って
 姿よき馬を走らせたその足
 いまここに 薄く堅いふとんに眠る
 南無阿弥陀佛
 南無阿弥陀佛
 私は遺体に別れを告げた
 同室の老人三人
 顔にとまるうるさい蠅を打ち払いもせず
 黙念と坐る

この建物には呼吸がない
 中庭の長い幾本の竹竿には
 大きなむつきが干されていた
 私はそそくさと
 静寂の地の底から抜け出した
 初秋の陽はさんさんと明るく
 大気は小鳥の声をのせて流れ
 青い稲穂は共鳴の波をうねらせた
 私は大きく呼吸をして
 野道で白い花を摘んだ

ニヤンニヤン

この頃孫が
 いろいろの片言をしゃべりだした
 お吸物はおちゆう
 みかんはちゅいちゅい
 うどんはちゅうちゅう

まことに上手に使い分ける
 うちに犬が二匹いる
 ワンワンといくら教えても
 ニヤンニヤンという
 絵本を買って来て犬を見せても
 馬でも牛でも豚でも鳥でも
 人間以外はすべてニヤンニヤンである
 裏庭に魚の腹わたを捨てると
 どこからともなく鳥が無い下りたり
 縁側に猫が忍びよったり
 表通りを牛や馬が重い荷車を引いて通ったの
 も
 屋根の上で雀がさわいだのも
 つい昨日の事のように思えるが……
 近日私は孫をつれて
 動物園にでも行こうと思っている

死刑囚

今日或る囚人の死刑確定の報があった
あ、かわいそうに

私は思わずつぶやいた

だが 私も又死刑囚である

他人が私を

電気椅子に坐らせないだけの違いである

小鳥のさえずるような可愛らしい子供たち

希望を運んで来るような青年の足音

彼らも又一人残らず死刑囚である

私はこの上なく臆病で

その上見栄張りである

私が最後の時を迎えたとき

恐怖でふるえながら

どんな顔をするだろう

追憶

屋根の先端で

鬼瓦が風雪に破れ

ペンペン草が

そのいかめしい鼻先をなぶった

壁土は流砂となつて崩れ落ち

歳月の重圧を支えきれずに

家は音立ててくずれ去った

青苔が太い幹を覆った杏の木

雨垂れが穴を穿った庭の石

その根元に犬の屍を埋めた柿の木を

四季折々に咲いては萎んだ草花を

落葉を焚いた湯殿の煙りの匂いを……

夜更けのアパートの一室

私の頬が冷たくぬれたのは

故郷の家に氷雨が降っているのだろうか

檻

檻に入れられたライオンは

草原を疾駆して獲物を追ひ

その肉を引き裂いた勝利の咆哮は

もう忘れてしまったことだろう

檻に入れられた巨象は

千古の大樹をなぎ倒し

抗うものを踏み砕いた王者の威厳は

もう示す由もない

我が家とスーパーマーケットと銭湯と

今日も暮れた

私はもう老いてしまった

栗

私は栗が好きだ といつても

この荊の剛情な厚い皮をむいてまで

食べようとは思わない

空ビンに挿した

栗の刺はまったく美しい

根

挿木をしたサツキが

今年大きな花を咲かせた

ほんのわずかな日数が過ぎて

花は散った

根が張って鉢が小さくなったので

私は古い根を切り捨てた

幹を太らせ

枝を張り

葉を繁らせたこの古い根

私の子供たちはそれぞれに家庭を持ち
今はもう

私の助言も手助けも必要としなくなった

私は小さな植木鉢を

日当たりのよい所へ廻したり

枝葉を調べたりすることが日課になった

今日も私はよく暗れた初秋の風のなかで

切り捨てたサツキの根を土に埋めている

釜

電気炊飯器を買うようにと

子供らが推めてくれる

けれどこの古い鉄の釜は

私の若いとき

何度も何度も御飯を炊き損じて

姑の気嫌を損ねたものだ

ながい苦しい戦時中

来る日も来る日も雑炊を炊いた

私の生活の

ささやかな喜びも悲しみも

みんなこの釜のなかから生まれてきた

なんとしても私はこの釜が捨てがたい

丸干

しばらく音沙汰のなかった末ッ子が

今日訪ねてきた

小魚の丸干と山菜漬を手土産に持ってきた

末ッ子は丸干の干加減

値段の安かったことなど

自分の見立てのよさを得々と自慢して上機嫌

だった

末ッ子が帰っていった後で

家内中が笑いだした

彼は結婚するまで

八百屋魚屋など男子の行く所に非らずと

如何なることがあっても

行こうとはしなかった

この固く干し上がった丸干の夕食は

大変楽しく美味だった

誤 藤棚の下にて孫を遊ばせる碁石に種を拾いて
正 藤棚の下にて孫を遊ばせる碁石に似たる種を拾いて

年金を初めて受けたる孫等に土産を買いて家路を急ぐ

朝夕にこの道通る人ならむ軒下の植木次ぎ次ぎ盗まる

御一人様一袋なる特売の砂糖を三度び並びて買いぬ

行きずりにふと立ち止まりお互いに子守りはつらしと老婆笑いぬ

藤棚の下にて孫を遊ばせる碁石に種を拾いて

かろうじて事なきを得し若き日よ姑婆殺のニユース悲しむ

老いらくの旅路は此処に終りたし小さき家をローンにて買う

この甘も当世風かも形よくて味もなければとんと香らず

言い返す言葉をグイとおさめたり一人になりて茶碗打ち砕く

その昔の遊廊の町人気なくうす気味わるき木立しげれる

破れたる高堀の内覗きみれば唯雑草の背丈にしげる

遊廊の隣りに古き神社ありあわれ女は何を祈りし

玉垣に妓楼の名前つらねたる稲荷のほころは雑草に埋れり

死に近き夫をみとれば寒空を鳥なくなりおぞ

人気なき家秋風にしずもりて我知る人は何処に移りし

わが髪をなぶりて孫は眠りたり背中にぬくもり伝いくるなり

なんとなく空しき事のしのばれてはらいのけたり銀のおち髪

雨もりのきこえぬ家に住みたしと久しく思いこの秋も逝く

もくせいのおこはかとなくただよいて祭太鼓の遠くきこゆる

メ繩は事もなげに束ねられ祭りの後の雨にぬれたり

昔一本千五百円也二度ためらいて買うて帰るぬ

ましきかな

鳥なき気にかゝる日よ背をさすれ腹をなでよとたえまなく言う

一日でも我より先に死に給えと言ひし言葉をくやみいるなり

仏壇の遺影さむげに見ゆる夜は酒を供して話しかけるも

この酒が命とりしとつぶやきつつ遺影の前にながく坐りぬ

微逝きて姫路は遠くなれりという人も情けもまことはかなき

湯豆腐に酒汲む夢をみしという胃潰瘍の夫に粥をすすめる

仏前の酒をのみたり声あげて泣き泣きじやく
り眠りにおちぬ

春浅き風の冷めたさ露のとう好みし人を徳ぶ
夕餉よ

寄りかかり寄りかかられてようやくに朽ちて
果てたり悔いのみ残る

時刻こそは医やすならむと友去りぬ氷雨の夜
の更けてゆくなり

髪白く肩を落して帰りゆく友のうしろをなが
く見送る

いさかえば嫁も己れも傷つかむ心おさえて孫
をいだきぬ

あれあれという間に年の瀬を迎え六十五才の
除夜の鐘きく

ろにがきかな

屑くずとつぶやきいたり我が一生無為に過せ
りと思わる、日に

西海の藻くずと消えし公達を恋いつ、ゆきし
女の墓はも

金なきは首なきも同じという女高利貸のうす
き唇

頭髪の霜目立ち初めたり生くるとい証しは
今も見きわめぬまま

浮き草の吹きよせられては離れゆく二階の人
は移転するらし

目鼻もつものはいとしも捨てかねて又仕舞う
なり古き人形

何はとも煙草ばかりは買溜めたし値上げの秋
の風のきびしさ

この道の果ては間近かと思うなり一日一日を
悔いなく生きむ

友をたずね帰り来たればわが家の破れ畳のい
たく目に沁む

人は皆猿なりと思う佗びしもよわれ知る人の
立候補する

草むらに月を仰いで寝ころびたしコンクリー
トの露地に鳴く虫

身の上を問わず語りに話すなり待合室の旅の
芸人

アパートは草もかおらず到来の露の藪みそは

働くことを生きる証しと覚えたり手持ち無沙
汰のいらだたしさよ

名も知らぬ地を這う草の小さき花見やれば小
さき実も結びおり

その根元に犬の屍を埋めたる廃屋の柿を夢に
みし朝

亡き人の詩書多数ありて整理する差押え通知
のはさみてありき

俳句

Faint vertical text columns on the left page, likely bleed-through from the reverse side.

Faint vertical text columns on the right page, likely bleed-through from the reverse side.

初七日の集いや菊の散りそめぬ

祭壇はとりはらわれて遺影のみ

木枯しの道連れもなし黄昏るる

冬日の一刻映えて闇に入る

破れ畳火鉢でかくし招じたり

春の雨猫すさまじく鳴き交し

負い紐のわが背を噛みて孫ぬくし

わが鏡くもりたるまま老いの春

年賀状彼も白髪となりたらむ

また一本前歯抜けたり風渗みる

花だより聞きつつ白髪ぬいている

道草をつみつ、いつか日は西に

シャツ一枚替えるでもなし老の春

むなしさを渗みとおらせて花の雨

枯草に蝶終焉の羽根を閉ず

お茶漬けのやっぱりうまい四日かな

緋扇の浮び来るなり梅の墓

室君の香り訪ねて梅の墓

本堂で土産売るなり梅の寺

折紙の兜をせめて初節句